

## 2.大内北古墳群発掘調査報告

### 1. はじめに

今回の発掘調査は、鳥取豊岡宮津自動車道(野田川大宮道路)の新設工事に伴い、京都府道路公社の依頼を受けて実施したものである。今回の道路建設予定地内の遺跡の取り扱いについて、京都府教育庁指導部文化財保護課と京都府道路公社による協議の結果、周知の遺跡である大内北古墳群と、分布調査によって新たに確認された2か所の古墳状の隆起地点を対象に発掘調査を実施することになった。

調査にあたっては、京都府教育委員会、京丹後市教育委員会、京丹後市子供みらい課、大宮町各自治会、地元三重・森本区をはじめ多くの関係機関、方々からご指導、ご協力をいただいた。また、現地調査に際しては、調査補助員をはじめ、大宮町在住の作業員の方々には記録的な猛暑のなか困難な山上での作業に参加いただいた。心より謝意を表したい。

なお、発掘調査に係る経費は全額、京都府道路公社が負担した。なお、本報告は辻本が執筆した。本文中で表示した国土座標は、世界測地系を用いた。

**現地調査責任者** 調査第2課長 肥後弘幸

**調査担当者** 調査第2課長補佐兼調査第1係長 小池 寛

同 次席総括調査員 辻本和美

同 主任調査員 竹原一彦

同 主査調査員 柴 暁彦

**調査場所** 京丹後市大宮町森本星ノ内、三重大内・大池

**現地調査期間** 平成22年4月30日～9月22日

**調査面積** 1,200㎡

### 2. 位置と環境(第1・2図)

京丹後市大宮町は、丹後半島の中央部に位置し、北東部には標高620mの高尾山を主峰とする山塊が連なる。竹野川はこの高尾山山系に源を発し、丹後半島を貫流して日本海に注ぐ。大内北古墳群は、竹野川の上流部にある三重谷と呼ばれる南北に長い狭隘な谷平野の縁辺に位置し、標高115mの丘陵尾根端部に立地する。同一丘陵上には、大内古墳群(16基)・大内東古墳群(3基)が分布している。このうち大内1号墳は調査が行われており、長径約25mを測る楕円形墳で、墳丘中央部から割竹形木棺を納めた内法長2.7m、幅0.7mの竪穴式石室1基が検出されている。石室内からは鉄製武器類や農具類が出土しており、築造時期は4世紀後半から5世紀前半頃と推定されている。また、大内古墳群の丘陵下には、弥生時代後期から平安時代にかけての集落跡とみ



第1図 調査地位置図

られる三重遺跡が分布する。

三重谷周辺には、このほかにも数多くの遺跡・古墳群が分布していることや、東側の丘陵尾根部を越えて阿蘇海側に通ずる交通上の位置にあることからみて、早くから開けた地域であったと考えられる。

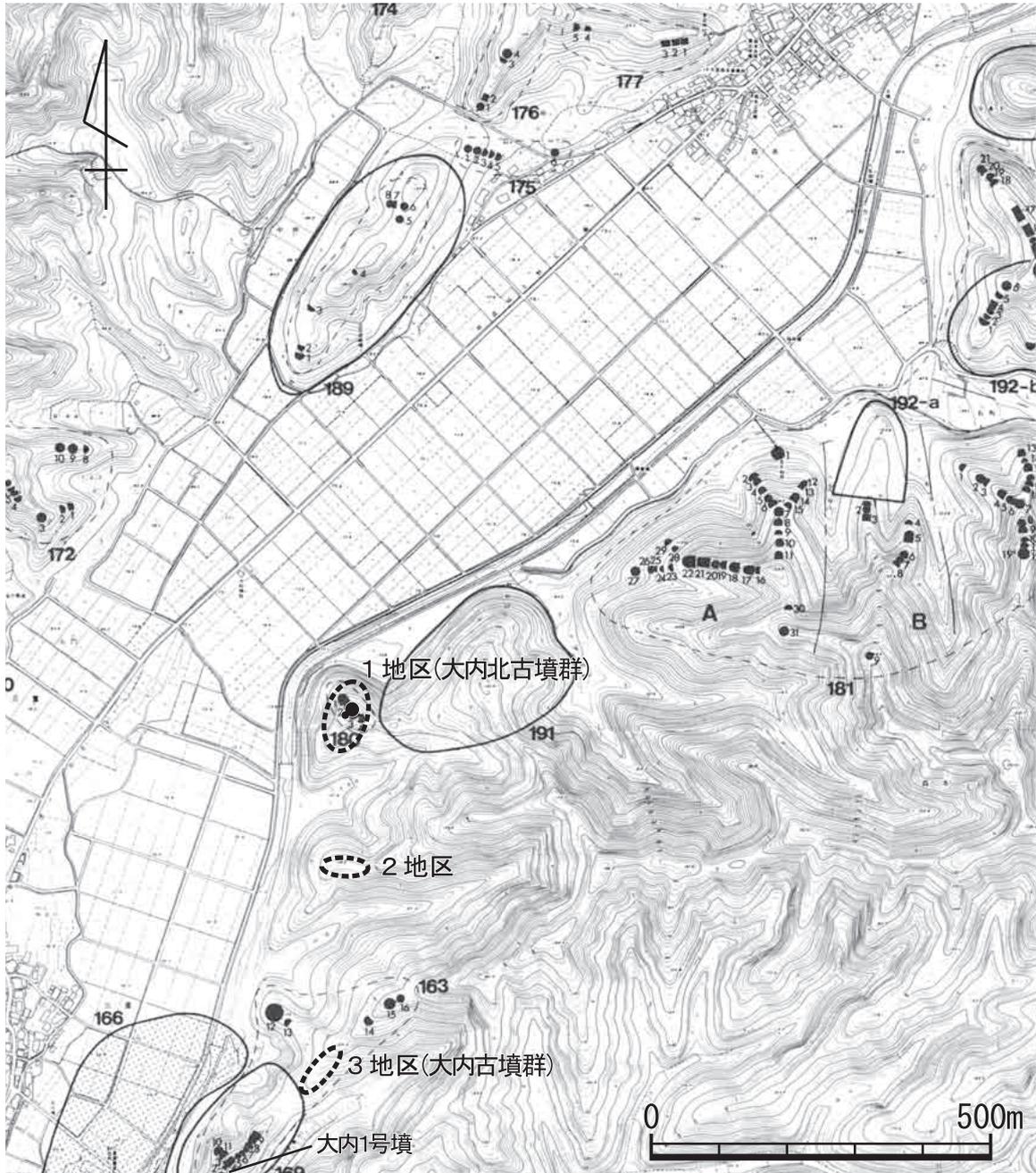
今回調査を行った大内北3号墳と地理的・年代的に比較的近い古墳としては、大谷古墳があげられる。大谷古墳は同市大宮町三坂に所在した全長32mの帆立貝式前方後円墳で、後円部中央に設けられた赤色顔料塗りの組合式石棺内から熟年女性の人骨とともに、捩文鏡、玉類(硬玉製勾玉・ガラス玉)、鉄斧・鉄剣・刀子が出土している。築造時期については、古墳時代前期末～中期前葉に比定されており、大内北3号墳と同様に組合式石棺を主体部とする古墳として注目される。

### 3. 調査の経過

今回の道路建設予定地における分布調査の結果、総長約800mの間に、古墳状の隆起を呈するか所が、大内北古墳群のほかに2か所で確認された。これらについて古墳の有無を確認するための試掘調査を実施した。地区の名称については、大内北古墳群を1地区とし、この南側にあたる丘陵部を2地区、3地区と呼称する(第2図)。

調査対象地となったそれぞれの地区の現状は山林であり、調査にあたっては、まず樹木伐採から開始した。その後、ラジコンヘリによる調査前の空中写真撮影と地形測量を行った。また、1地区の大内北古墳群については、細部の地形を補足的に測量した。

発掘調査はまず、1地区から開始し、2地区、3地区の順に進めた。結果的に、2・3地区では古墳の兆候は得られなかった。多数の埋葬施設が検出された1地区の大内北3号墳については、再度8月20日にラジコンヘリによる空中写真撮影と調査地の遺構実測を行った。また、調査の終



第2図 周辺遺跡及び調査地位置図

(『大宮町遺跡地図 京都府大宮町文化財調査報告』第17集 1999から転載・改変)

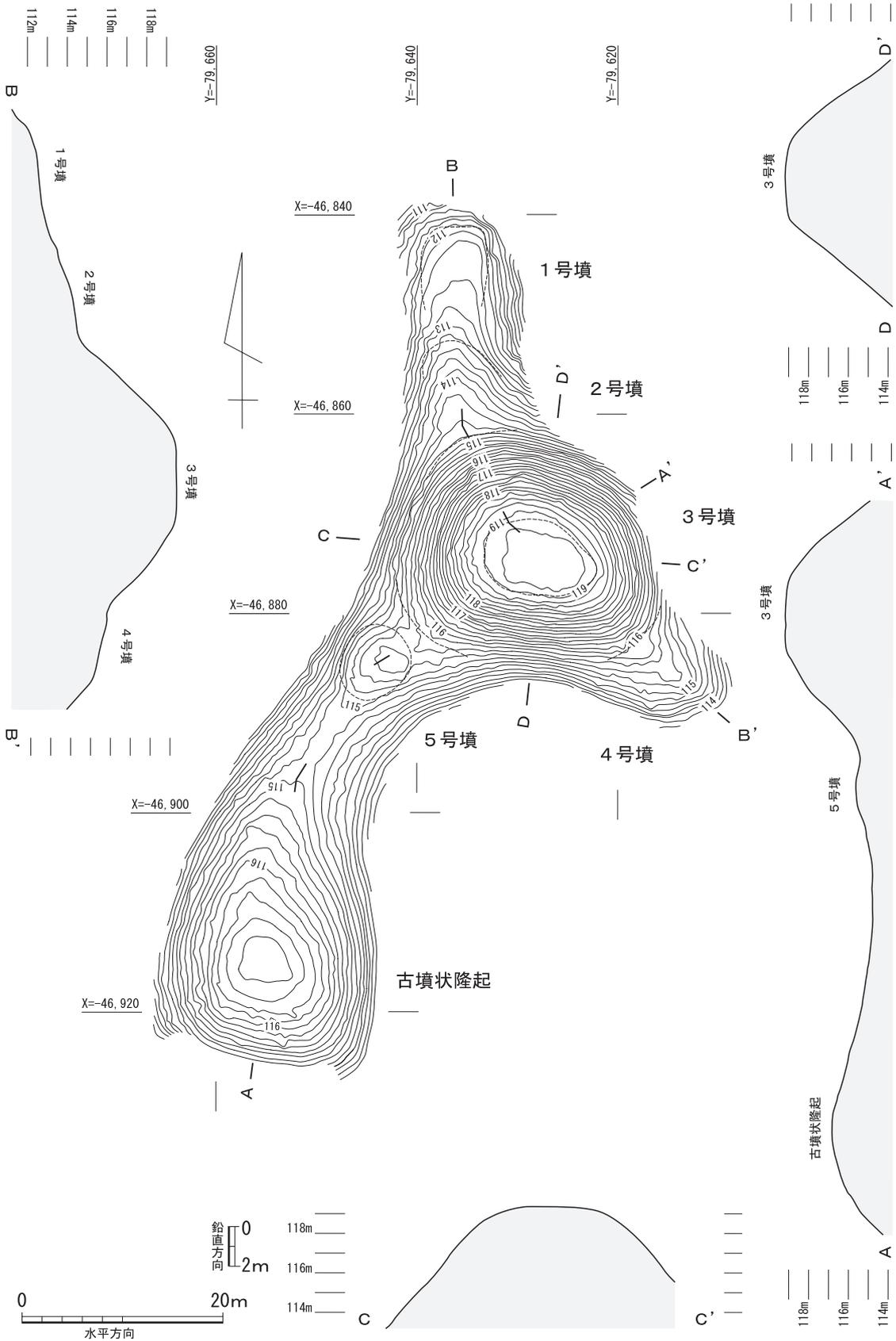
- |              |             |              |             |
|--------------|-------------|--------------|-------------|
| 163. 大内古墳群   | 166. 三重遺跡   | 172. 大谷城南古墳群 | 176. 森本大谷古墳 |
| 177. 愛宕神社古墳群 | 180. 大内北古墳群 | 181. 星ノ内古墳群  | 191. 三重城跡   |
|              |             | 192. 星ノ城跡    |             |

わりに近づいた9月5日(日)午前11時から大内北3号墳の現地説明会を開催し、摂氏35.8°(宮津市の最高気温)という記録的な猛暑のなか、70名近い参加者を得た。

#### 4. 1地区の調査(大内北古墳群)

##### 1) 古墳群の状況

大内北古墳群は、盟主墳である3号墳を中心にして5基の古墳によって構成されており、また、



第3図 大内北古墳群調査前地形図

今回の分布調査によって南側の尾根先端部に古墳状の隆起部が確認されている。

大内北3号墳は竹野川を見下ろす小丘陵の頂部に築かれた長軸25m、短軸23m、高さ4mを測る東西方向に長いやや歪な円墳で、墳頂部には長軸12m、短軸8mの平坦面を形成している。墳丘の最高地点は標高119mで竹野川周辺の水田面との比高差は約40mを測る。墳丘の南斜面と北斜面は狭い間隔で等高線が直線状に走る。また、北東と西側の墳丘斜面はそのまま丘陵斜面部に移行しており、墳丘裾を確定するのは現状では難しい。墳丘上からは、現在樹木によって見通しが利かない部分もあるが、北側から西側にかけて谷平野を眼下に望む眺望が開ける。3号墳からは、1・2号墳および4号墳、5号墳のそれぞれ北、南東、南西の3方向に丘陵の小尾根が伸びており、それらの尾根が合わさる位置に構築された3号墳は視覚的にも際立った外観を示す。

1・2号墳は3号墳から続く標高115mから111mの緩やかな傾斜面に立地する。1号墳の北側では比高差40mをもって丘陵下の平野部に向かって急激に落ち込む。両古墳は、中央でやや高まりをみせる連続した方形の階段状地形を呈し、1号墳は長辺16m、短辺10m、高さ約1.1m、2号墳は長辺11m、短辺10m、高さ約0.5mを測る。形態や調査前の地形測量からみて丹後地域に類例の多い台状墓と想定された。

4号墳は3号墳の墳丘南東裾に接する位置にあり、長辺10m、短辺9m前後の平坦部をもつ。5号墳は3号墳に接して南西に延びる丘陵上に位置しており、径7m、高さ0.3mの低平な円墳状地形を呈している。

また、5号墳の南西には、1～5号墳とは独立した比高差約2mの古墳状の高まりが認められた。

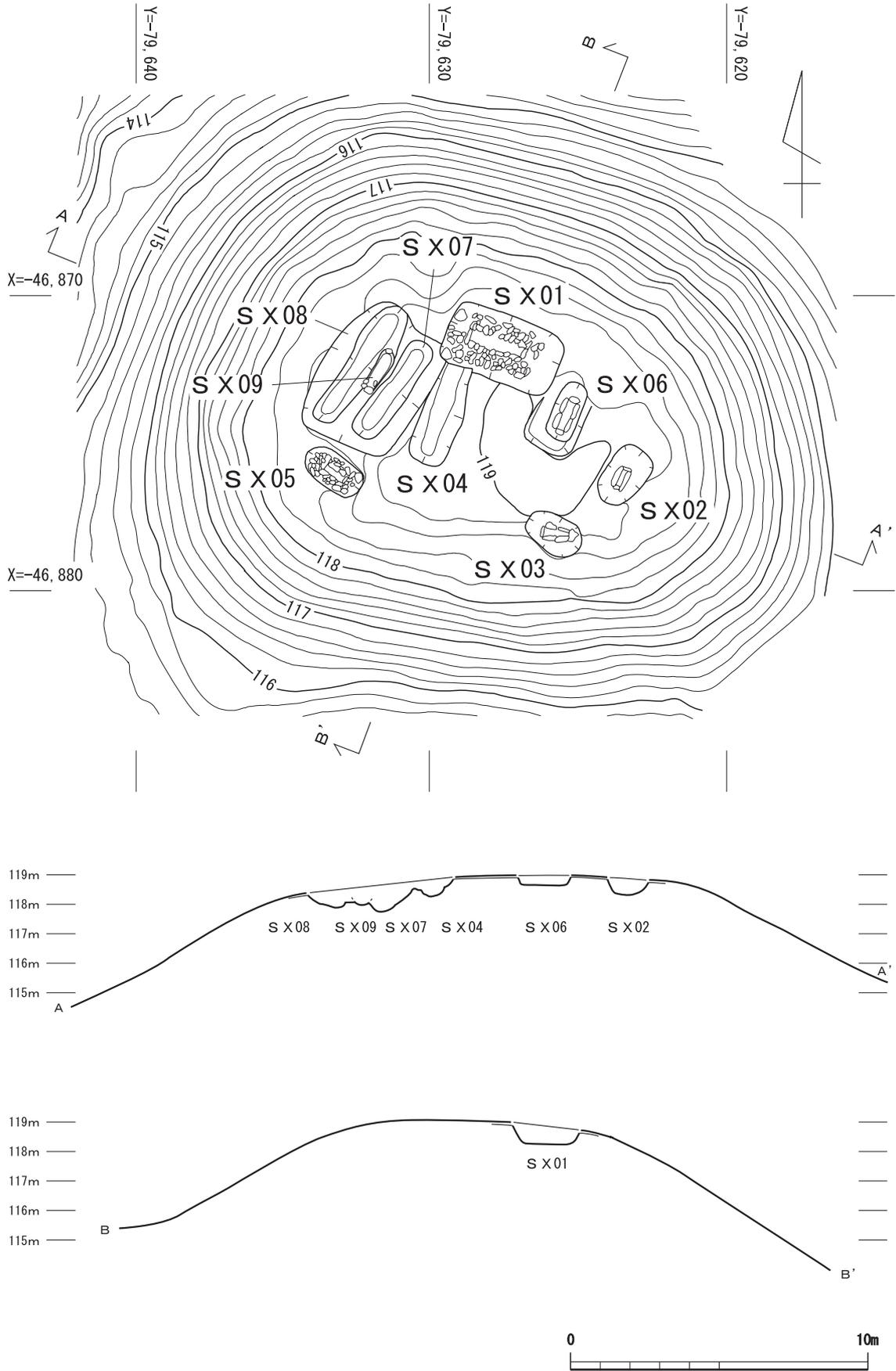
## 2)大内北3号墳の調査(第3・4図)

調査にあたっては、まず周囲の古墳との関連と墳丘の構築状況を確認するために、幅1mのトレンチを墳丘を四分する形に設置して行った。その後、トレンチに沿って土層観察用の畦を残して墳丘表面を覆う腐植土を全面除去し、埋葬施設の検出作業を行った。なお、掘削で生じた廃土については、雨水等によって調査地外に流出する危険性があるため、安全対策として傾斜が急な北西側と北東側に土留め柵を設置した。

墳丘の腐植土を除去すると直ぐに風化した花崗岩が露出し、各埋葬施設は概ねこの花崗岩を掘り込んで構築されていた。すなわち墳頂平坦面の北側の縁辺からは、竪穴式石槨1基が主軸を東西に置いて検出され、また東側と南側からは、箱式石棺4基が墳頂平坦面の縁辺に沿うように検出された。さらに木棺直葬の埋葬施設3基が、墳頂中央から西側にかけて主軸の方向を揃えて検出され、墳頂平坦面の埋葬施設の配置状況は稠密なありかたをほぼ南北に示している。

墳丘の築造にあたっては自然地形の高まりを最大限に利用し、地山を掘削して整えられたものと考えられるが、墳頂平坦面の北東側では地山上に暗黄褐色の粘砂質土による盛土が一部で確認された。この部分については墳頂部の高低を揃えるため若干の盛土を行ったものと思われる。なお、調査前の外形観察では、埴輪・葺石・段築等は認められなかった。

以上の結果、大内3号墳からは竪穴式石槨1基、組合式箱式石棺4基、木棺直葬4基の合計9



第4図 3号墳墳丘及び埋葬施設配置図

付表1 埋葬施設規模一覧

## 豎穴式石槨

埋葬施設	墓壙規模(m)			石槨規模(内法:cm)			天井石	備考
	長さ	幅	深さ	長さ	幅	高さ		
S X01	3.75	2.0	0.35	190	西 40 東 28	25	5石	被覆粘土、鉄槍先1点、鏝状鉄器1点出土

## 箱式石棺

埋葬施設	墓壙規模(m)			石棺規模(内法:cm)			蓋石	備考
	長さ	幅	深さ	長さ	幅	高さ		
S X02	上段2.14 下段1.5	1.35 0.83	0.6	60	18	36	6石	壁面赤色顔料塗布
S X03	2.0	1.0	0.7	85	西 26 東 15	30	5石	
S X05	0.16	1.1	0.46	74	東 18 西 15	18	5石	
S X06	上段3.0 下段2.1	1.8 1.0	0.34	96	南 26 北 24	23	5石	刀子1点出土

## 木棺(直葬)

埋葬施設	墓壙規模(m)			木棺規模(cm)			棺形態	備考
	長さ	幅	深さ	長さ	幅	高さ		
S X04	3.5	1.5	0.45	300	80	20	割竹形	
S X07	5.1	3.65	0.5	384	85～100	20	割竹形	棺北東部に赤色顔料集積
S X08				455	58～86	20	割竹形	鉄鎌1点出土
S X09	1.7	0.5以上		130	50	残存部34	箱式	両小口に割石

基の埋葬施設が検出された。各埋葬施設についてはそれぞれ検出順に、S X01～09の遺構番号を付けた。以下、これらの埋葬施設について記述したい(付表1)。

## (1)埋葬施設S X01(第5・6図)

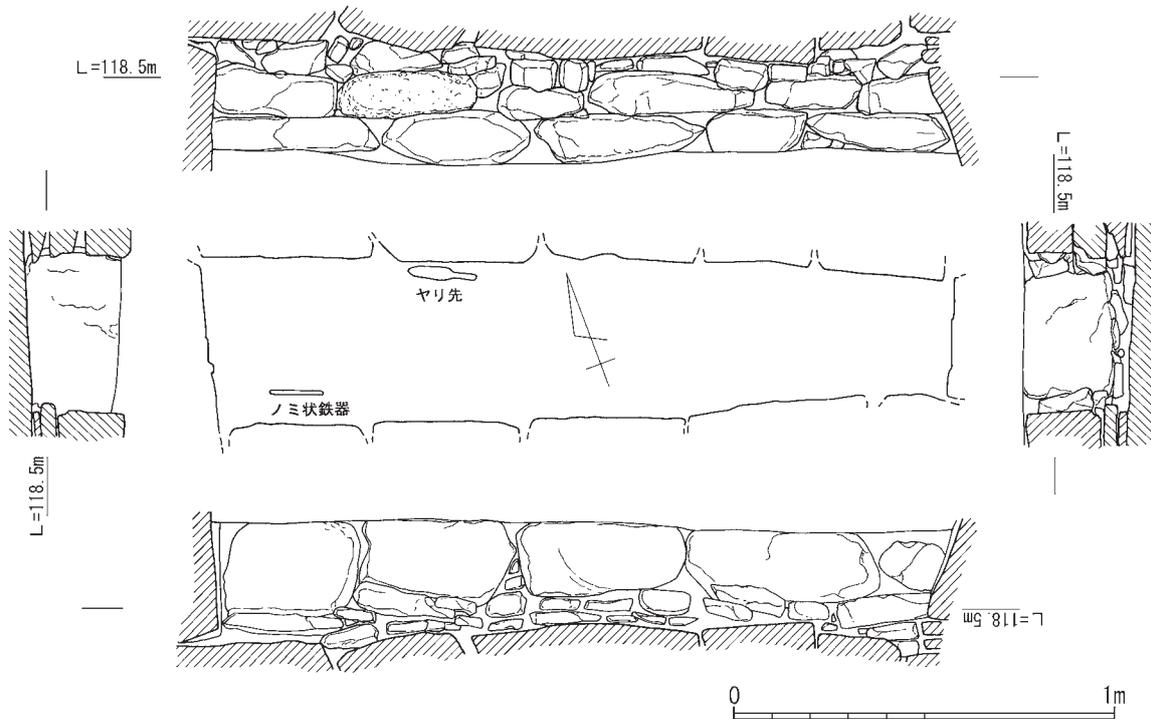
豎穴式石槨<sup>(注1)</sup>を内部主体にする埋葬施設である。墳頂平坦面の北東縁辺側に沿って位置する。主体部を納める墓壙は、花崗岩の風化した土からなる地山面を掘り込んで構築されている。墓壙平面形は隅丸の長方形を呈し、長軸を北西から南東方向に置く。規模は、長さ3.75m、幅2m、底面までの深さ0.35mを測る。調査では、まず表土の腐植土を除去した段階で天井石と思われる扁平な大形の石材が並んだ状態で検出され、その周囲に灰褐色粘質土の分布が認められた。この灰褐色粘質土は、天井石の石列周囲と上部面にも広がっており、石槨上部を覆う被覆粘土であることが分かった。使用されている粘土は、小礫と砂を多く含む良質なものとは言えない。この被覆粘土は天井石下面の石材上面にも広がっており、天井石を架ける際に高さ揃えのために置かれた側壁上部の小石材を粘土で固定し目張りするための役目を担っている。天井石は長さ90cm、幅60cm程度の大きさのものを最大に、概ね扁平な石が使用されており、合計6個の石材で構成される。それぞれの天井石が重なる間隙部には小礫を並べて目張りを行っている。墓壙と豎穴式石槨の側石及び小口石との間には、裏込めとして多数の礫を詰めている。特に墓壙の北東隅と南



東隅には比較的大きな石材を置いている。

竪穴式石槨は、内法で長さ190cm、幅は短側面(小口)西側で40cm、東側で28cm、高さ25cmを測る。石槨の主軸はN70° Wを示す。石槨の幅が東側で少し広くなることから、東側を頭位として被葬者を安置したものと思われる。石槨の石積みは、基本的に石の平らな面を内側に向けて構築される。北側側壁では、5個の石材を横長に並べて基底石とし、その上にやや小ぶりの石材を1段ないし2段積み上げて壁面とする。これに対し、南側側壁はやや広い面をもつ方形の石材4個を並べて壁面を構成し、天井石との間には小さな石を詰めて空隙を埋める。両短辺の側壁(小口)は、長方形の扁平な石材各1個を横長に置いて構築する。また、この両小口の裏側に接して小口石を支持するように石が置かれていた。石材については、5点をサンプリングしてプレパラート作成による石材鑑定<sup>(注2)</sup>を行った。鑑定結果により、黒雲母花崗岩・普通角閃石・砂岩が使用されていることが分かった。これらの石材は当丘陵の周辺で採取されたものと考えられる。調査最終時点で石槨部分の小口石を外した結果、小口石の下部を埋め込む形で小穴が掘られていることが判明した。これは小口部の安定を行うとともに天井石を置くときの高さ調整を図るためと思われる。石槨は墓壇底を基底として構築されており、特に東側部は礫層からなる地山面が露出する。石槨内は、しまりのない砂質土でほぼ充填されていたが、棺の存在を示すような痕跡は検出することができなかった。石槨内の土層断面の観察では、地山上に黄褐色粘質土の置土を行って床面とした可能性が大きい。

出土遺物としては、石槨内の東側小口部付近から、鉄器2点を検出した。1点は北側側壁に接する位置で壁面と平行に切先を東方向に向けて出土し、その配置・形状から槍先と考えられる。



第6図 3号墳埋葬施設S X01竪穴式石槨実測図

もう1点は鑿状鉄器で、南側側壁面に接して壁面と平行した状態で出土した。2点の鉄器は石槨底部の地山面から4cm程度上で出土しており、この点からも、石槨底部には薄く置土を行って床面としたものと考えられる。

### (2) 埋葬施設 S X 02 (第7図)

墳丘平坦部の東側縁辺部で検出した組合式箱式石槨からなる埋葬施設である。埋葬施設 S X 06の南東側に1.4m距離を置いて位置している。

長さ2.14m、幅1.35mの墓壙を掘り込みその内部に石槨を構築する。検出時は小山状に重なった石材集積の形状から、丹後地域に多くみられる経塚とも推測されたが、調査の結果、古墳の埋葬施設であることが判明した。集石群は墳頂の腐植土を除去した時点で検出された。上部は最大30cmから50cm程度の割石を中心に、大小の石が長さ約1.6m、幅約1.1mの広がりをもって積み上げられた状態であった。これらの石材を除去すると墓壙長軸に対し直行する状態でやや細長く扁平な石材が並んで検出され、石槨の蓋石であることが確認された。墓壙内には蓋石上部を覆うように石材が充填され、一部は墓壙と石槨の間隙にも詰められている。蓋石は5石からなり、自然石の平坦面を利用して棺身の上部を覆うように並べられているが、両端部は棺よりも外側に出る。墓壙下部は石槨を納めるためにさらにもう一段掘り込まれている。

棺の構造は、長さ約80cm、幅約30cm、厚さ約15cm程の大きさをもつ扁平な石材を横長にして長辺側の側石とし、左右各1石で構成される。短辺側、すなわち小口は長さ約30cm、幅約18cm、厚さ約8cmの長方形石材を立てて用いる。小口の石材は側石端部の内側に挟みこまれた状態で組み合わせられており、さらに背後に固定させるためと思われる石材を置く。棺の内法規模は、長さ60cm、幅18cm、高さ36cmを測る。棺底には石を用いていない。石槨の主軸はN25° Eを示す。

棺の内壁面には、上半部を中心に赤色顔料(ベンガラ)<sup>(注3)</sup>が残っており、四方の壁面に赤色顔料が塗布されていたことが分かる。また、棺床面にも赤色顔料が含まれた土が堆積していた。これらは壁面から顔料が流れ落ちたものと見るより、棺底の地山面に整地を行って、その上にも散布していたものと考えられる。なお、赤色顔料は、蛍光X線分析の結果、水銀朱をわずかに含むパイプ状ベンガラであることが判明した。棺内からの遺物の出土は無かった。

### (3) 埋葬施設 S X 03 (第8図)

埋葬施設 S X 02の南西方向に2m程離れて位置する。埋葬施設 S X 02と同様、組合式箱式石槨を内部主体とする。立根により墓壙の南側部分は大きく攪乱を受けており本来の形状をとどめていない。墳丘平坦面の南縁際に長さ2m、残存部の計測で幅1～1.2mの墓壙を掘り込んで石槨を構築する。腐植土を掘り下げると、比較的大形の石材を中心にしてその周りに割石を積み上げた集石が表れた。当初、これらの石材が蓋石等にあたるものと予想したが、石材を取り除くとさらに墓壙の長軸と並行に並ぶ4個の石列が確認され、これらが蓋石であることがわかった。蓋石は他の石よりやや大形のものをを用いており、扁平な面を選んで石槨の上面に合わすように置かれていた。これらの蓋石を外し石槨の本体を確認した。埋葬施設 S X 02と同様、石槨背後の墓壙内



には礫石を充填する。石棺本体は、両小口に各1石、長辺側に各2石の計6石によって構成されている。底石は用いられていない。棺の規模は、長さ85cm、幅は西側小口部で26cm、反対側の東側小口部で15cmを測る。高さは30cmを測る。石棺の主軸はN80°Wを示す。小口の幅は、西側が広くっており、埋葬に際しての頭位を意識していたとすれば、本棺の被葬者は規模からみても小児と考えられる。石棺に使用された石材のうち両側壁は、北側壁の1石を除き、壁面に適した方形の石材を横長に用いている。西側の小口の石材は扁平な石を用いているのに対し、東側の小口石は角をもつ方形の石で、その内の平らな一面を壁面として使用する。すなわち石棺を上部からみると三角形を呈している。小口の石は、側壁両端部の外側に塞ぐようにして置かれており、埋葬施設S X02例のように側壁に挟まれるものとは異なった形式をとる。石棺の底部は、墓壙底である地山面が露出するが、この上面に土を敷いて床面としていたかどうかは明らかでない。棺内から遺物は出土しなかった。

#### (4) 埋葬施設S X04(第11図)

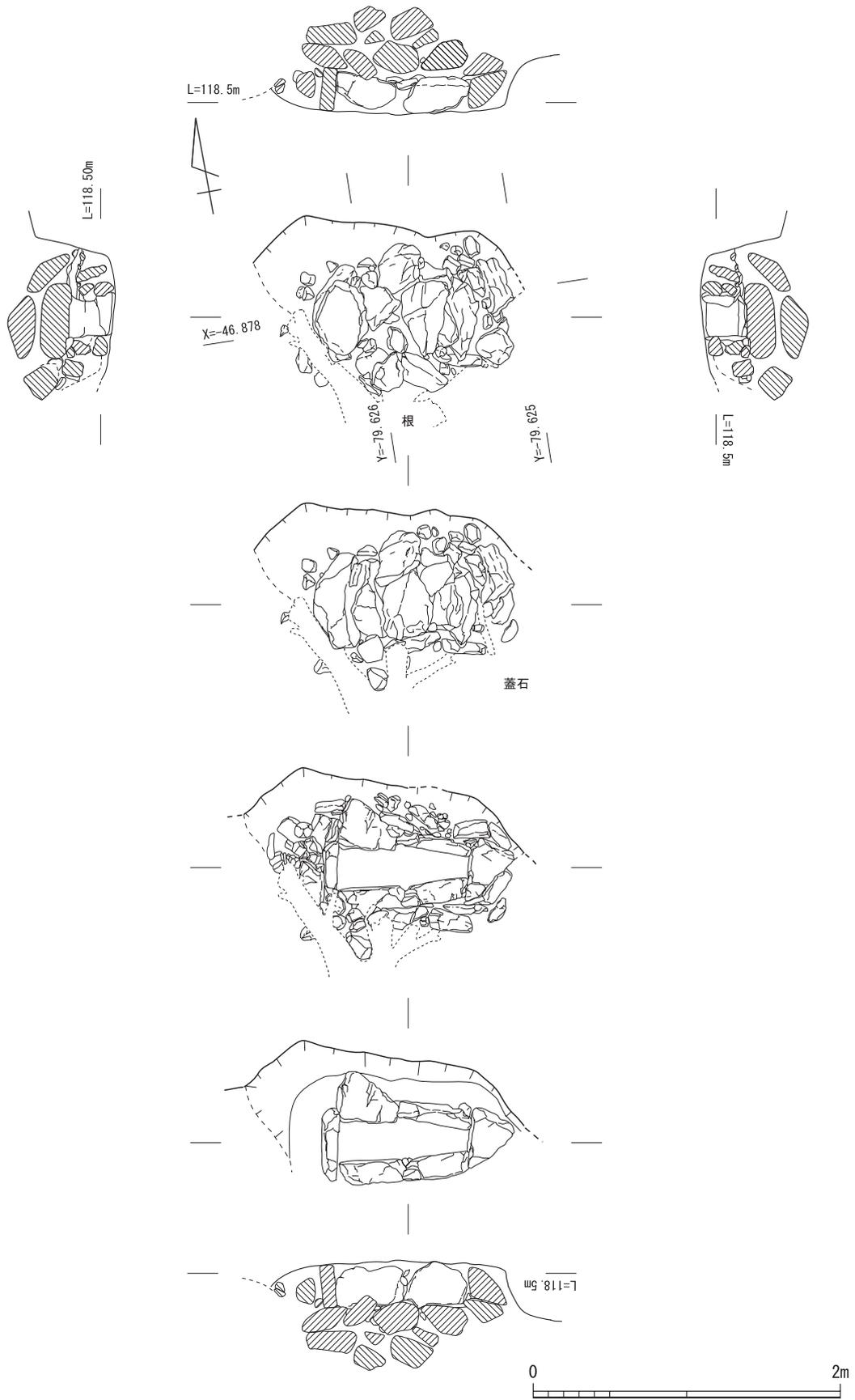
墳頂部平坦面のほぼ中央部で検出された木棺を直葬した埋葬施設である。墓壙は花崗岩の風化土の地山面から掘り込まれている。墓壙は、北西から南東方向に長軸を向けて、平面形は隅丸の長方形を呈している。検出長は3.5m、幅1.5mを測る。墓壙の北端部は、埋葬施設S X01により切られている。また、墓壙西側の掘り込み部分も、土色の変化や硬さの違いが明瞭でなく検出の際に時間を要したが、最終的にこの部分は埋葬施設S X07・08の墓壙によって削平されていることが判明した。墓壙は、上面から下方に向かって緩やかな傾斜をもって掘削されており、上肩部から20cm程深くなった位置で角度を変えて段を形成する。下段の掘り込みは墓壙の全体に及んでおり、いわゆる二段墓壙を構築していることが判明した。下段の墓壙は、底部がやや平坦な横断U字形を呈しており、この部分に木棺が据え置かれていたものと思われる。二段目の墓壙の形状から、棺の形式は割竹形木棺と推測されるが、墓壙両端部の小口面も内側に向かって緩やかに傾斜しており舟底形の底部をもつ棺であった可能性もある。木棺の規模は、残存部の長さ3m、幅0.8m、残存部の高さ0.15mを測る。棺の主軸はN20°Eを示す。一段目と二段目墓壙の埋土の状況はあまり差異が認められなかったが、下段墓壙の方が若干粘土質が強い傾向がみられた。棺および墓壙内からの出土遺物はなかった。

上述したように、本埋葬施設の墓壙は、埋葬施設S X01及び埋葬施設S X07・08によって切られており、構築時期は、これらの埋葬施設に先行することがわかる。また、構築位置が墳頂部のほぼ中央を占めていることからみて、各埋葬施設のなかでは最も早く構築されたものと考えられる。

#### (5) 埋葬施設S X05(第9図)

墳頂部平端面南西側の縁辺部に構築された、組合式箱式石棺からなる埋葬施設である。他の石材を使用する埋葬施設とはやや離れた地点に位置する。

墓壙は、花崗岩からなる岩盤が風化して軟質な砂礫層となった地山を、やや斜め下方に傾斜をつけて掘り込んでいる。墓壙の平面形は、長楕円形を呈しており、北西から南東方向に長軸を置



第8図 3号墳埋葬施設S X03平・断面図

く。上面での規模は、長さ2.16m、幅1.1m、深さは地山面の高い東側で0.6m、反対側の西側で0.3mを測る。墓壙の検出に合わせて壙内を少し掘り下げたところ、墓壙の長軸と平行に5個の石材が並んだ状態で検出された。これらの石列の周辺に重なった石材を取り除いた結果、石列が石棺本体を覆う蓋石であることがわかった。

蓋石は、中央に位置する石材が最も大きく、長辺75cm、短辺35cm、厚さ25cmを測るが、他の4石はこれを超えないやや小形の石材を使用する。蓋石は、比較的扁平な面を下側にして石棺本体の上部に架けられており、蓋石が覆う範囲は石棺の両小口端を超えている。蓋石の周囲および墓壙内には、多数の石塊が隙間なく充填されており、その範囲は墓壙上面に達している。

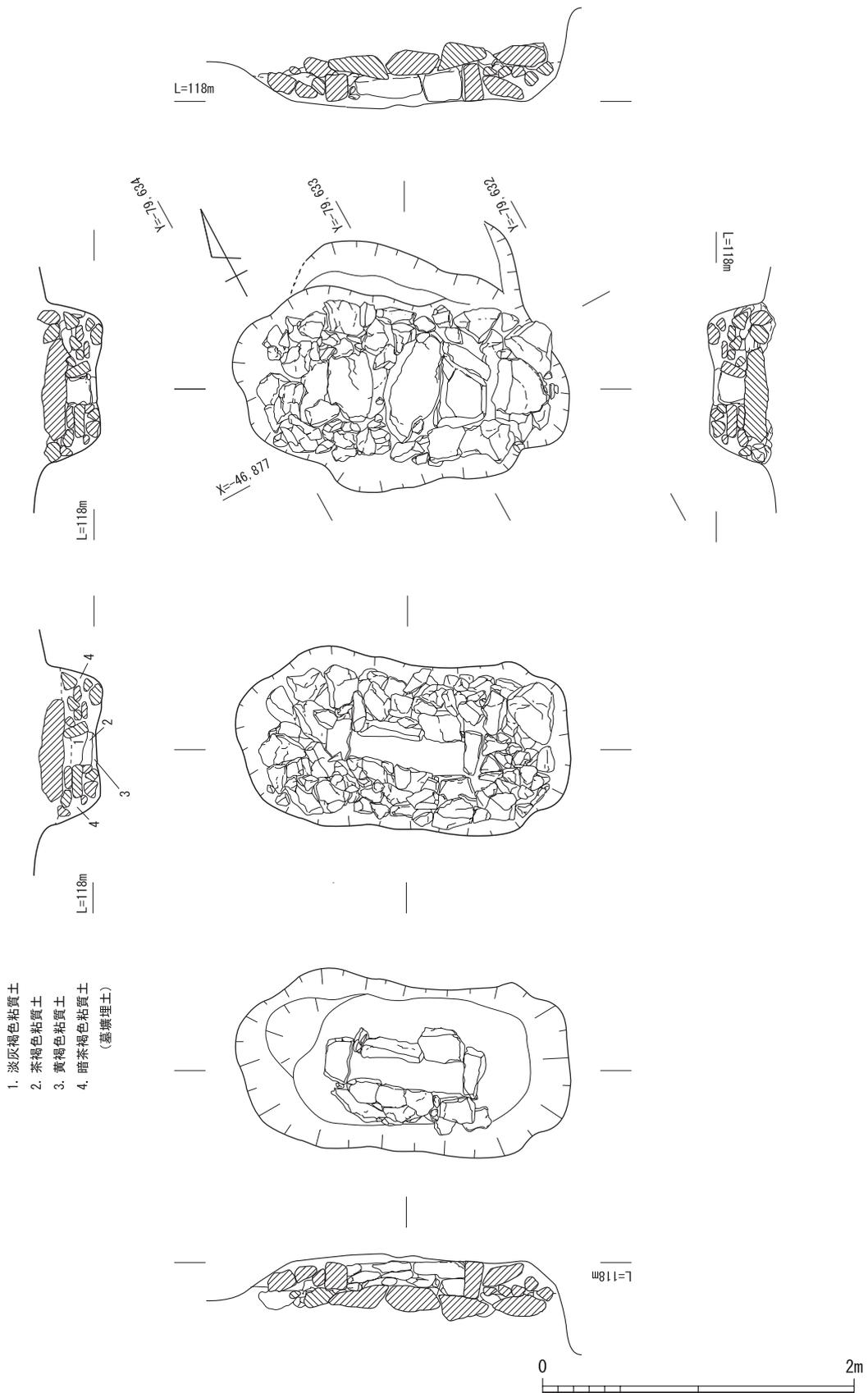
石棺本体は、墓壙底面の中央に設置されている。石棺の内法規模は、長さ74cm、東側小口で幅18cm、西側小口で15cm、高さ18cmを測る。石棺の主軸はN54°Wを示す。石棺の側壁の組み合わせについては、両小口部は方形状を呈する石を選び、その平滑な一面を棺の内側にして各々1石で構築されている。側石は左右でやや異なった構成をとる。北側の側石が2石を並べて構築するのに対し、南側の側石は、基底に3石を平積み置き、その上に平滑な小口面をもつ小形の割石を2～3段に重ね置いて構築している。北側壁のうちの1石は、検出前から既に背後の裏込め石からの加圧によって石棺内側に少し倒れ込んだ状況であったことがわかる。石棺底部に底石はなく墓壙底の地山面が露出する。

両小口の石材は、側石端部の外側に置かれており、側壁を両小口で挟む形状を示す。石棺部の実測の後、全ての石材を除去し側壁下部の状態を確認した。その結果、側石は墓壙底に直接石材を置いており、地山面を掘り込んで石材を設置するための据え付け穴等の痕跡は検出されなかった。出土遺物はない。

本埋葬施設は、墓壙の裏込めに多量の石材を充填するように、全体の構築の形態は埋葬施設S X01の竪穴式石槨に類似することが窺われる。今回、大内北3号墳で検出した石棺の側石は、基本的に1段で構成されているが、この埋葬施設S X05の側石は複数段積み上げて構築しており、他の石棺とは異なる形態をとっている。これらも埋葬施設S X01に類似する点であり、両者は規模の差をもつものの共通する構築方法で造られたものと考えられる。出土遺物がなく築造時期については不明確であるが、埋葬施設S X01とほぼ同時期か、その構造を省略した形で埋葬施設S X01の後に造られたものと考えられることができる。

#### (6)埋葬施設S X06(第10図)

墳頂部の東寄りにあり、埋葬施設S X01と埋葬施設S X02に挟まれて位置する。組合式箱式石棺からなる埋葬施設である。墓壙は、埋葬施設S X01の墓壙東側辺に接する形で、花崗岩の地山面を掘り込んで構築される。墓壙の南西側は、地山の高い部分から掘り込まれており15cm程掘り下げた位置で一端、平坦な面を形成する。この位置からさらに内側に石棺本体を埋納するための墓壙を掘り込んでおり、いわゆる二段墓壙の形状をとる。これに対して上段墓壙の東側半分は地形の下がりとなるため墓壙は全周せず、検出時の平面形状は「コ」字状を呈している。下段墓壙は、上段墓壙から少し控えたか所から掘り込まれており幅30cm程の平端面を残す。下段墓壙



第9図 3号墳埋葬施設 S X 05平・断面図

の東側部は上段墓壙面に連続して掘り込まれており平坦面をもたない。上段墓壙の規模は、残存部での長さ約2m、幅1.8mを測る。下段墓壙は長さ2.1m、幅1m、深さ0.34mを測り、平面形は方形状を呈している。また、下段墓壙短辺の北東側は、石棺小口部の蓋石に重ねる石材を置くためか、墓壙の中段から外側に張り出す小さな平端部を形成している。

石棺本体の上部は、蓋石の上にさらに蓋石の隙間を埋めるように比較的扁平な石材が1～2段重ねて置かれている。蓋石は5石で構成され、石材の平な面を石棺身に重ねて置かれている。石棺本体は、下段墓壙に納まる大きさ一杯に構築されており、そのため石棺背後と墓壙壁との間隙は狭くなっている。墓壙内には、裏込め土として暗褐色粘土が充填されており、埋葬施設S X02や埋葬施設S X03にみられたような裏込めの石塊は詰められていない。石棺の側石は、両端の小口部に方形の石材を各1石、両側壁は、扁平な石材を各2石使用し、合計6石によって構成されている。棺底部は石材を用いない。石棺内法の規模は、長さ96cm、幅は北側小口で24cm、南側小口で26cm、高さ23cmを測る。石棺の主軸はN28°Eを示す。両側の側石は、やや平滑な面を石棺の内壁に用いており、側石の間には小石材を詰め込んで安定を図っている。側壁の構築にあたっては、小口の石を先に設置し、その後、この小口を挟む形で側石が置かれている。壁を構成する石材は、今回検出した4基の石棺のなかでは各面が整った方形状の花崗岩が用いられているが、北東側側壁の1石は風化の進んだ軟質の石が使用されていた。

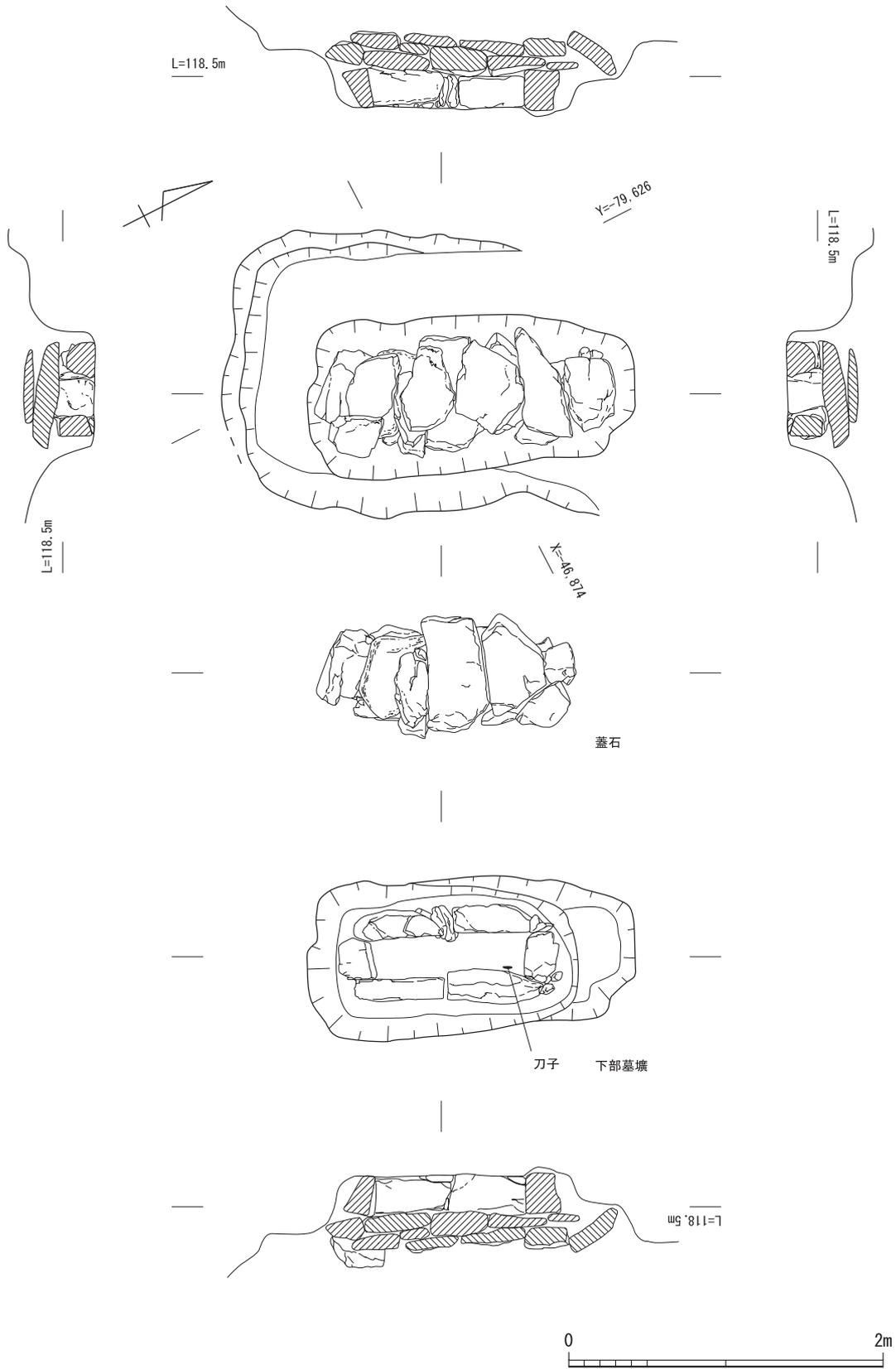
副葬品については、石棺内部の北東隅部から、切先を北側の小口に向けた状態で鉄刀子1点が出土した。これ以外に遺物は出土していない。

#### (7) 埋葬施設S X07(第12図)

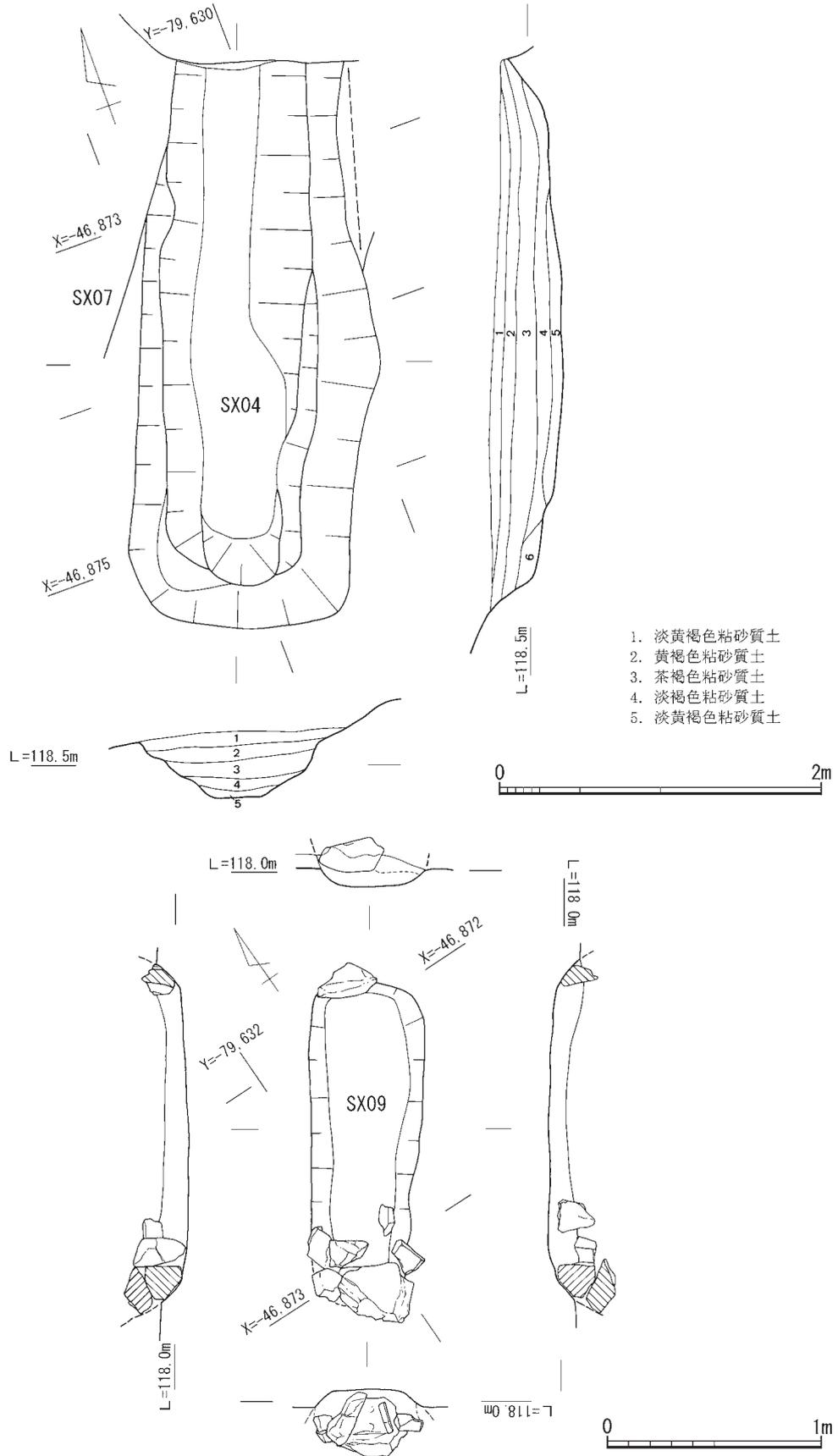
墳頂部平坦面の西寄りに位置する埋葬施設で、東側に埋葬施設S X04、北東側に埋葬施設S X01が接している。木棺を直葬する埋葬施設で、埋葬施設S X08・09と共に同一墓壙内に棺を納める。墓壙は、花崗岩風化土の地山面から掘り込まれており、北東から南西方向に長軸を置いている。墓壙規模は、長辺側の南北面で約5m、短辺側の東西面で約3.5mを測る。埋葬施設S X04の項で記述したように、墓壙北東側は埋葬施設S X04の墓壙を切り込んでおり、さらに、この部分に重なるように竪穴式石槨を主体部とする埋葬施設S X04の墓壙によって切られている。S X07の墓壙埋土の上面には、S X01の主体部を構築した際に使われなかったと考えられる大形の石材が遺存しており、構築の順序を判断するうえでの手がかりとなる。

墓壙は上下二段からなり、上段墓壙の下面部に3基の木棺を据える下段墓壙が平行して掘り込まれている。埋葬施設S X07はこれらの主体部のうち東側に位置しており、木棺を納める下段墓壙の規模は、長さ3.82m、中央部の幅0.85m、残存部の高さ0.25mを測る。棺の主軸はN35°Eを示す。

墓壙断面の形状から割り抜きの木棺を据え置いたものと考えられる。墓壙の底部まで掘り下げたところ、北端側から赤色顔料の広がりが検出された。赤色顔料は約1～2cmの厚さを持ち、長さ1.15m、幅0.35mの範囲に広がっていた。特に北側部分では厚く堆積する状況を示していた。この高まり部分を断ち割って断面の観察を行った。その結果、赤色顔料の堆積は「U」字形の断



第10図 3号墳埋葬施設S X06平・断面図



第11図 3号墳埋葬施設SX04・09平・断面図

面を呈しており、この曲面は割竹形木棺の底部を示すものであることが推測された。赤色顔料は木棺全体に撒かれたものでなく、位置からみて被葬者の頭部付近を中心に集積されたものと判断される。赤色顔料については、分析の結果、パイプ状ベンガラであることが判明している。

赤色顔料の遺存以外に、本埋葬施設からの出土遺物はなかった。

#### (8) 埋葬施設 S X08 (第12図)

埋葬施設 S X07 の西側に、長軸を揃え平行して設営された埋葬施設で、木棺を直葬している。上段墓壙の南側部分は、下段墓壙との間に平坦部を残すが、北側部分は埋葬施設 S X07 と同様、平坦部を設けず直接掘り下げられている。上段墓壙の西辺側は、地山上に盛土した軟質の砂質土面から掘り下げられている。

木棺を据え置くための下段墓壙の規模は、長さ4.6m、中央部の幅0.68m、残存部の高さ0.18mを測る。棺の主軸はN35° Eを示し、埋葬施設 S X07・09と同一の軸方向をとる。

墓壙底部の掘削深度は、埋葬施設 S X07 に比べて浅い。横断面の形状から、埋葬施設 S X07 と同様、割竹形木棺もしくは断面がゆるやかに弧を描く木棺が用いられたと思われる。墓壙の幅は、埋葬施設 S X07 に比べ狭いことが観察でき、やや幅の狭い木棺が使用されたことが推測できる。なお、北側で85cm、南側で56cmと棺の北側部分が広がっていることから、使用された木材の幅の広い側を頭部(北)に、狭い側を足側(南)に向けて置かれていたものと思われる。下段墓壙南西側の掘り込みの肩部分から鉄製鎌が1点出土したが、これ以外に出土遺物はみられなかった。

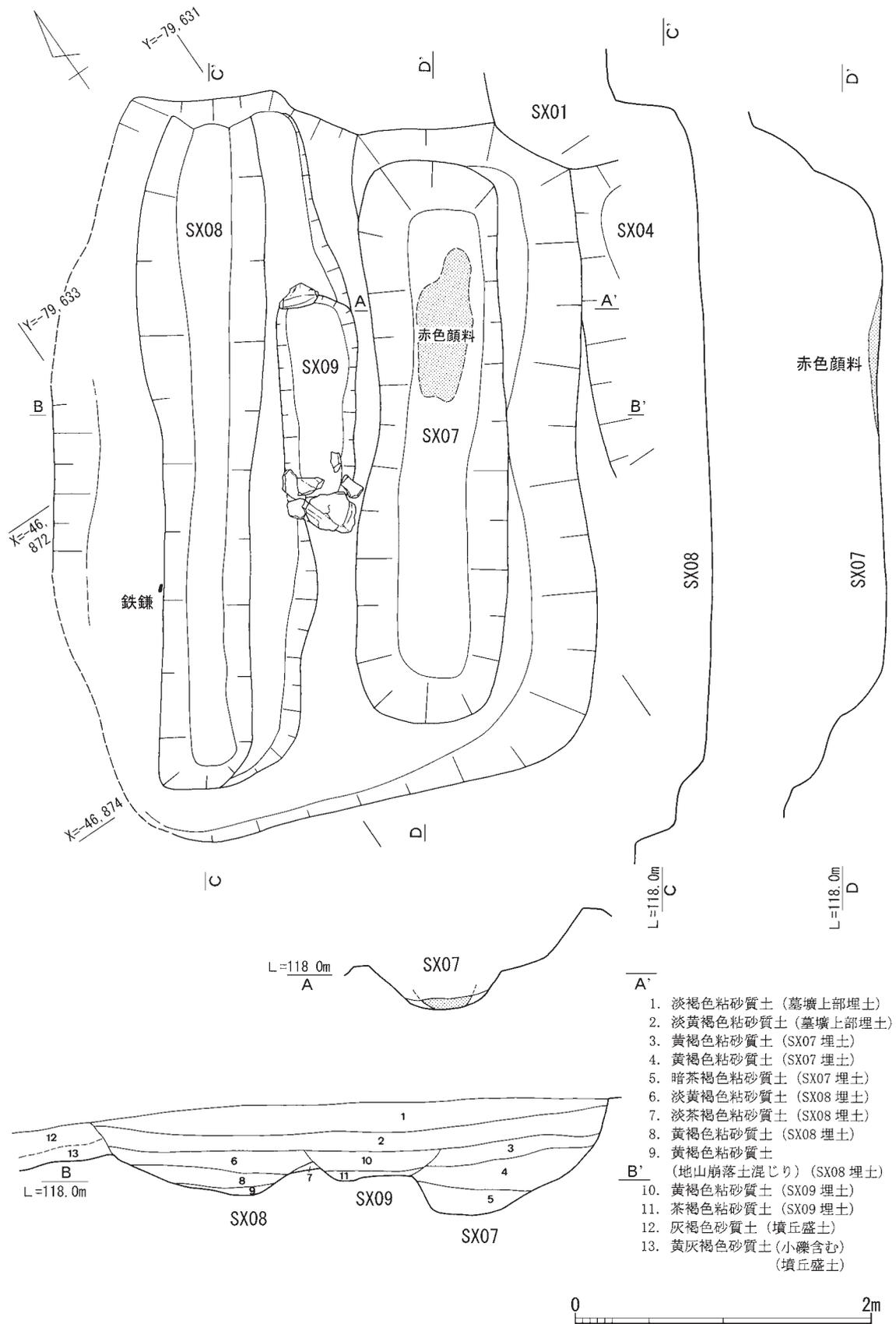
#### (9) 埋葬施設 S X09 (第12図)

埋葬施設 S X07、埋葬施設 S X08 と墓壙を共有する。埋葬施設 S X07 と同 S X08 に挟まれほぼ真ん中の位置に構築される。先の2基の主体部の断面が割竹形状の木棺を使用するのに対し、埋葬施設 S X09 は小型の箱式木棺を納めたと考えられる。小口部には石材が置かれており、この石材が小口板の代用であった可能性がある。このうち南側小口については、花崗岩の人頭大の石材を土と共に二段に積み上げ、さらにこの石組を挟むように、両側面側にも2個の扁平な石材が「コ」字状に立て置かれていた。なお、粘土の使用は認められなかった。木棺を納める墓壙の底部は平坦で、この形状からみて箱形木棺が埋納されていたものと考えられる。なお、木棺痕跡は確認できていない。

規模は、両小口の石組を含めた範囲で現存長170cmを測り、石組を除いた部分での内法長は130cm、幅50cmを測る。主軸はN35° Eを示す。前述の南側小口部の石組の性格については、不明な部分が多いが、現状では木棺小口の側板を裏側と側面から支持するための施設と考えておきたい。棺内外からの出土遺物はない。

棺の小口に石材を置く例としては、周辺の古墳としては、京丹後市帯城3号墳、与謝野町小虫2号墳第1主体、宮津市柿ノ木2号墳などの類例が知られる。

埋葬施設 S X09 からの出土遺物はなく、築造時期については明らかでないが、埋葬施設 S X07 と同 S X08 の間に、主軸を揃えて造営されており、しかも両主体部の下段墓壙を壊さないように構築されている点が注目される。墓壙面の掘り下げ時に設定した土層断面用の畔壁面の観察では、



第12図 3号墳埋葬施設 SX07～09平・断面図

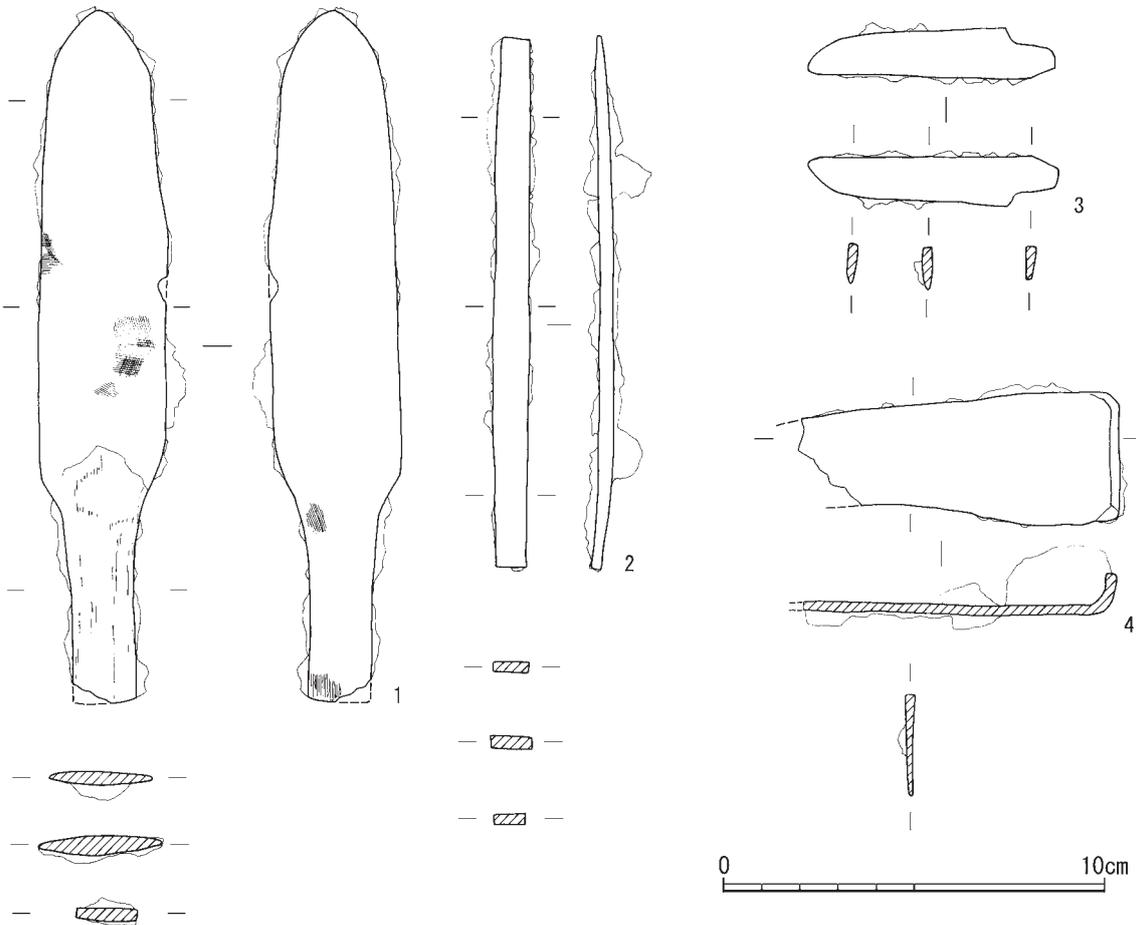
同質の墓壙埋土内での観察であり不確定な部分も多いが、埋葬施設S X09の墓壙は、埋葬施設S X07と同S X08の上段墓壙面を切り込んで構築されていることが確認できた。このことにより、埋葬施設S X09は、埋葬施設S X07・08の後に埋葬されたことが想定されるが、両埋葬施設の木棺部分を意識的に避けて構築されていることから、これらの3基の埋葬施設は、当初から同一の墓壙内に納めるため、計画的に造営されたものと考えられる。複数の木棺を同一の墓壙内に納める古墳の例としては、与謝野町鳴谷東3号墳と同小虫1号墳があげられる。いずれも5世紀前半に位置づけられている。

### (10) 出土遺物

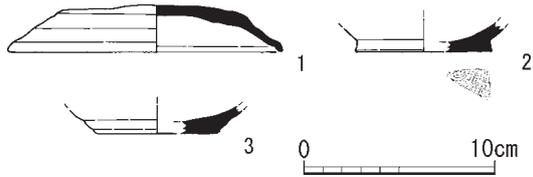
#### ① 鉄製品 (第13図)

**槍先**(第13図1) 埋葬施設S X01から出土した。ここでは槍先としたが短剣としての用途も考えられる。全長18.3cm、身長約12.5cm、幅約3.4cm、厚さ約0.5cm、柄長約5.8cm、幅は関で約2cm、柄尻で約1.6cm、厚さ0.5cmを測り、重量は現状で83gを量る。鏝は錆化が著しく明瞭でない。関部分も錆化によって膨らんでいる。現状では柄部に目釘穴は確認できない。身の片面には局部的に布状の圧痕が認められる。柄部についても柄と平行する縦方向の木質痕が認められるが、部分的に遺存するのみであり長柄との装着状況を示すものかどうかは不明である。

**鑿状鉄器**(第13図2) 槍先と同じく埋葬施設S X01から出土した。断面方形の細長い板棒状を



第13図 3号墳出土鉄器



第14図 3号墳出土土器

呈し、やや両端部に向かって反り返る。片方の端部は先が断面三角形状に薄くなっており形状から鑿とした。検出時点では反り返りの形状からヤリガンナとしていた。全体的に錆化が著しいが、長さ14cm、幅約0.8cm、厚さは中央で約0.4cm、端部で約0.2cmを測る。重量は現状で19gを量る。

刀子(第13図3) 埋葬施設S X06の棺内から出土した。全長6.6cm、刃部の長さ5.2cm、幅は関の部分で1.4cm、厚さは背で0.3cmを測る。刃部は関から3.5cmほどは同じ幅をもち、そこから幅を減じて切先に向かう。柄部は長さ1.4cm、幅は中央付近で0.9cm、厚さ0.3cmを測る。木質は観察できない。重量は現状で7gを量る。背部からみると全体にやや湾曲する形状をしめす。

鎌(第13図4) 埋葬施設S X08の墓壇肩から出土した。刃先端部を含む刃先の一部が欠損するが、この部分も錆化が進行しており破損した鎌を埋納した可能性がある。残存部の形状からは、刃は柄着装部から刃先に向かって湾曲して延びていくことが観察でき、曲刃鎌と考えられる。残存部の長さ8.5cm、幅は中央付近で2.6cm、柄着装部で3.5cm、厚さ0.2cmを測る。柄着装部は刃に直行する位置で斜めに約1cm程折り曲げられている。柄着装部の詳細についてはこの部分に錆塊が生じており不明である。

## ②その他の遺物(第14図)

墳丘頂部の表土腐植土を掘り下げた際、埋葬施設S X02周辺から少量の土器類が出土した。1は須恵器蓋である。数個の破片で出土したが、ほぼ一個体に復元できた。復元径14.4cm、高さ2.4cmを測る。天井部は扁平でつまみをもたないものである。2は高台付きの須恵器碗か瓶と思われる底部の小片である。高台の底部に回転糸切り痕をもつ。3は土師器杯または碗の底部片である。いずれも平安時代に属するものと思われるが、これらに関する遺構は認められなかった。

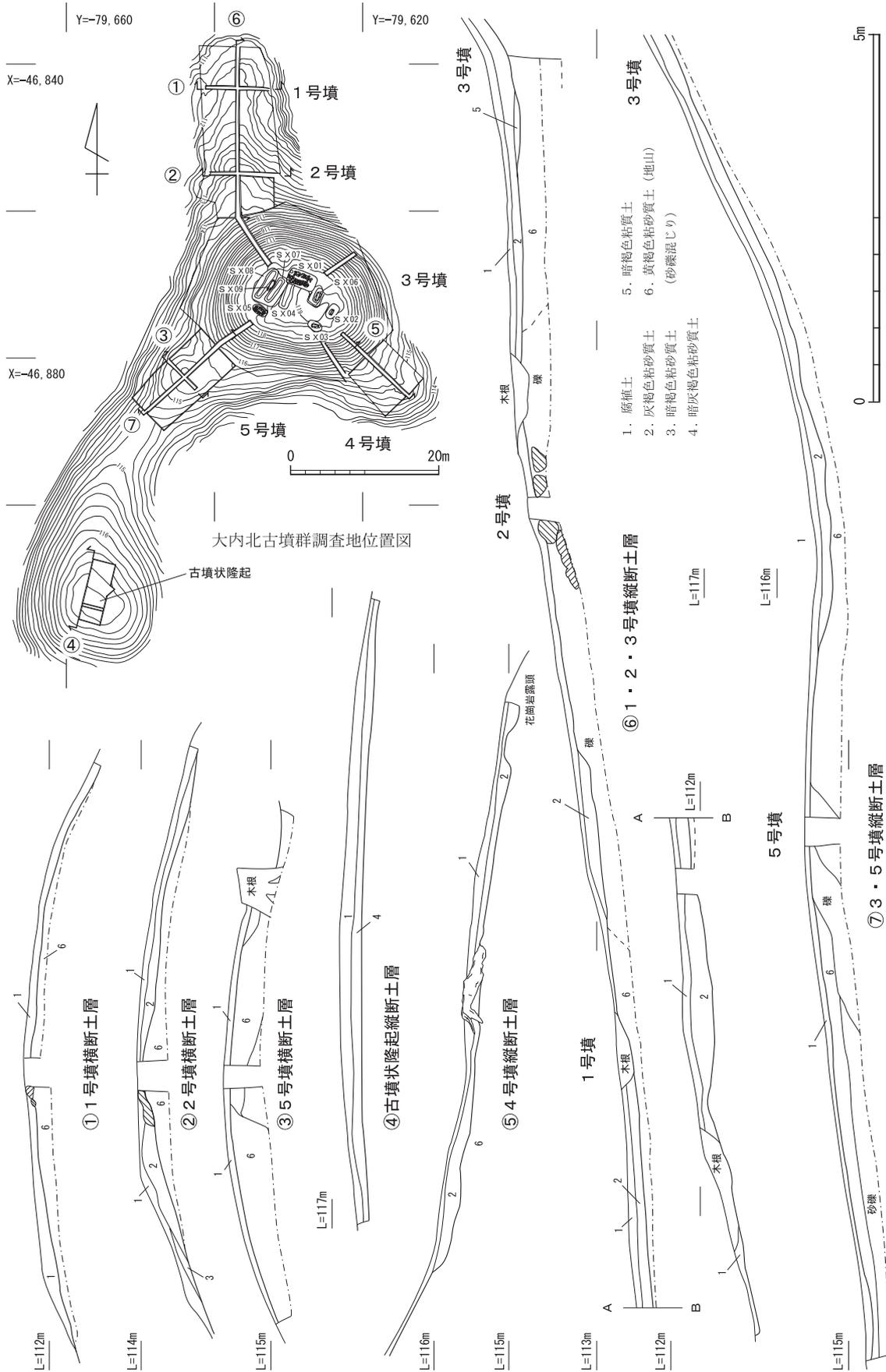
## 3)その他の古墳の調査(付表2・第15図)

大内北古墳群は、調査前は盟主墳である3号墳を中心にして5基の古墳によって構成されており、また、今回の分布調査によって南側の尾根先端部に古墳状の隆起部が確認されていた。

### (1)1・2号墳

1・2号墳は3号墳の北側尾根筋に認められた古墳で、その形状から、丹後地域に特徴的な台状墓と想定された。

調査は、まず3号墳から延長するトレンチを両古墳を縦断する形で設置し、さらにそれぞれの中央部を横断するトレンチを十字形に設けて行った。その後、トレンチ際に畦を残して土層の確認を行うとともに、墳丘全体の堆積土を除去して主体部の検出作業を実施した。調査の結果、表面を覆う腐植土の直下では厚さ10～15cmの灰褐色の粘砂質土が堆積し、それ以下は砂礫層が表れた。特に古墳の中心部と思われる部分では岩盤とみられる礫層が広がることが確認された。この礫層面と周辺部を精査したが主体部になるような遺構は検出できなかった。今回の調査結果では、古墳としての兆候を得ることができず、丘陵の小隆起からなる自然地形であることが判明し



第15図 大内北古墳群(1・2・4・5号墳)調査地及び土層図

付表2 大内北古墳群調査一覧

名称	形状	規模	調査内容
1号墳	方形（階段状）	一辺16m×10m、高さ1.1m	自然地形。古墳の兆候なし。
2号墳	方形（階段状）	一辺11m×10m、高さ0.5m	自然地形。古墳の兆候なし。
3号墳	円墳	長径25m、短径23m、高さ4m	埋葬施設9基確認。鉄器等の副葬品出土。
4号墳	方形（階段状）	一辺9m×10m、高さ0.5m	自然地形。古墳の兆候なし。
5号墳	円形	径7m、高さ0.3m	自然地形。古墳の兆候なし。

た。

#### (2) 4号墳

長辺10m、短辺9m前後の平坦部をもち、3号墳の墳丘南東裾に接する位置にあたる。3号墳の墳丘南東側斜面から延ばしたトレンチを設置して調査を行った。その結果、1・2号墳と同様に、表土の腐植土下で花崗岩の風化した砂礫層が検出されたのみで、主体部と思しき遺構や盛土を示すような土層の変化は認められなかった。また、3号墳裾部分での土層堆積状況の確認を行ったが、裾を区画するような地山の落ち込みや溝は検出できなかった。調査で露出した地山面の形状からみて、当部分は3号墳の墳丘造成のために地山の削り出しが行われた可能性がある。以上の結果により、4号墳については古墳でないことが判明した。

#### (3) 5号墳

3号墳から南西に延びる尾根上に位置しており、径7m、高さ0.3mの円墳状をなしている。墳丘を四分する形に十字形に畦を残して表土層の除去作業を行った。この結果、腐植土の表土下から厚さ5～10cmの暗褐色ないし黄褐色の粘質土層が検出された。その後、墳丘状の高まり面を中心にこれらの粘質土層を掘り下げたが、岩盤を構成する礫層面が検出されたのみで、主体部に係る土色の変化や落ち込み等の遺構は検出されなかった。また、3号墳の裾付近にあたる尾根高位の北東部分では墳丘土の流失と思われる暗褐色粘質土の堆積がみられたのみで3号墳の築造に伴う周溝等の遺構は検出されなかった。以上のように5号墳については、自然地形の高まりと判断されたが、この高まりは3号墳造成に際して古墳の裾を画するため丘陵尾根を掘り下げた結果、生じたものとも考えられる。

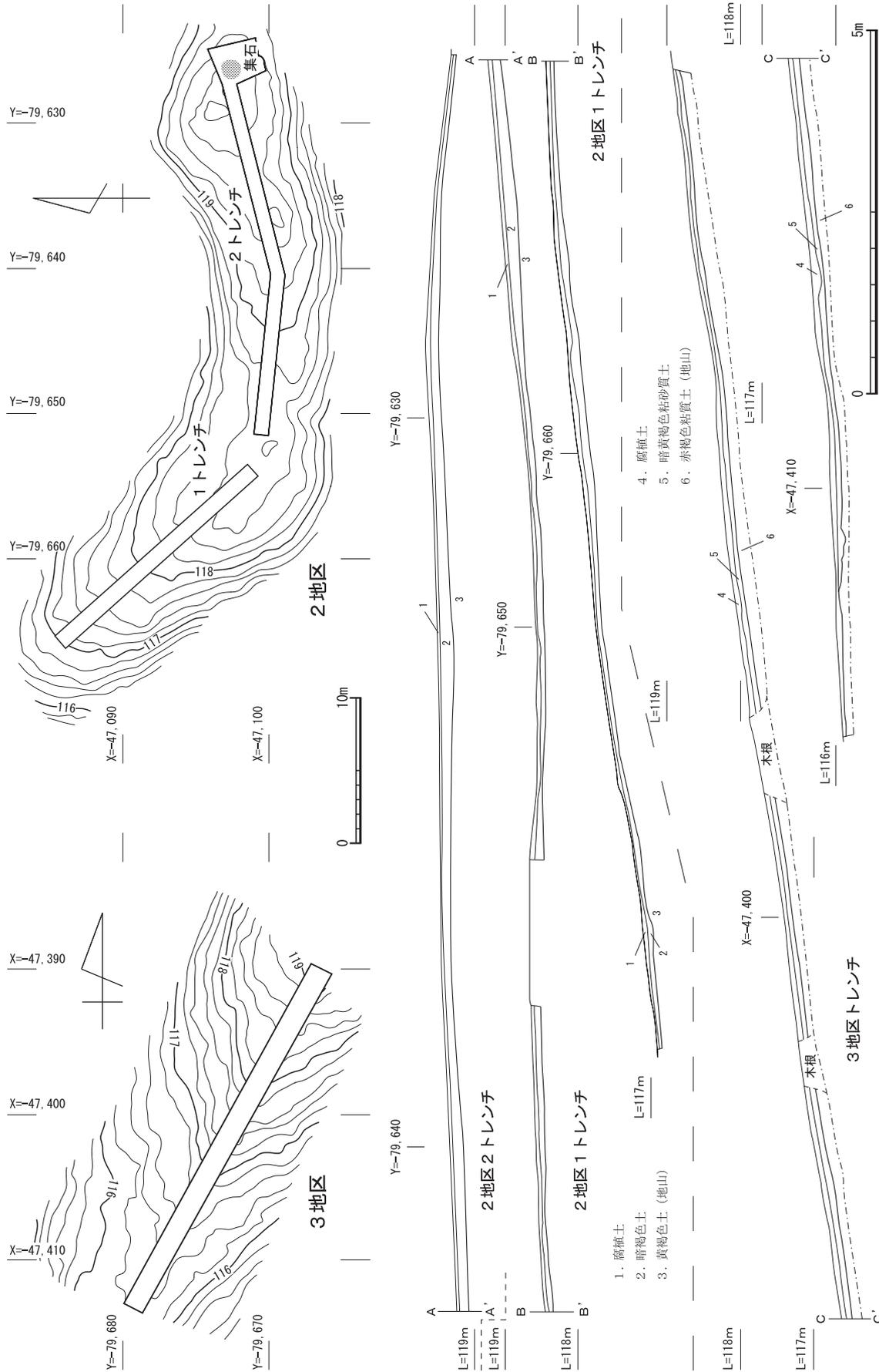
#### (4) 古墳状隆起

5号墳の南西に位置する古墳状隆起の調査を行った。その結果、自然堆積と思われる暗灰色砂質粘土層および礫層の広がりを検出したのみで、古墳としての兆候は認められなかった。この付近は固い礫層面が露出しており、周辺の山土の流失から取り残されて高い地形が形成されたものと考えられる。

### 5.2・3地区の調査(第16図)

今回道路建設予定地における分布調査の結果、古墳状の隆起を呈するか所が、大内北古墳群のほかに2か所で確認された。これらについて古墳の有無を確認するための試掘調査を実施した。

#### 1) 2地区



第16図 2・3地区古墳状隆起調査トレンチ及び土層図

大内北古墳群(1地区)の南方約200mに位置しており、東西に延びる丘陵の狭い尾根稜線上にあたる。120mから116mの標高差で東側から西側に向かって緩やかに傾斜し、中央付近で若干の高まりをみせる。調査は、東側尾根高所の隆起部と中央部の隆起部を結ぶ、やや屈曲する形状で幅1m前後のトレンチ2本を設けて実施した。調査の結果、丘陵の低い側に設けた1トレンチでは、表土の腐植土の下位で厚さ6～8cmの暗褐色の粘砂質土層を検出したが、それ以下は黄褐色土の地山面であった。地山面の精査を行ったが古墳等に関する地形の変化は認められなかった。丘陵の高所に設営した2トレンチについては、東端部の地形の高まりの周辺から、拳大から小児頭大の20数個の礫石の広がりを検出した。集石はこの部分に存在する木株を中心に径約1.2m程の広がり呈するが、腐植土の中にも石が含まれており、掘形等の落ち込みも検出されなかった。集石を除去して下部の精査を行ったが特に変化は認められなかった。出土遺物はなく不明確であるが、おそらく近現代の植林に伴う仕事の可能性が高いものと思われる。2トレンチについても古墳としての確認は得られなかった。

## 2) 3地区

2地区の南側約300m離れた丘陵上に位置し、大内古墳群の分布範囲にあたる。古墳状隆起は、標高119mから116mの丘陵部の北東側から南西側になだらかに傾斜する尾根の稜線部に所在し、周囲よりやや高い地形の高まりをみせる。調査は丘陵尾根を中心に幅1.5mのトレンチを設営を行った。調査の結果、2地区と同様、腐植土下で暗灰褐色の粘砂質土層が表れ、それ以下は花崗岩の風化土からなる黄褐色の地山面になる。トレンチ西側に沿って深さ30cm程の深掘りを行ったが、顕著な土層の変化は認められなかった。出土遺物はなく、3地区においても古墳の兆候は認められなかった。

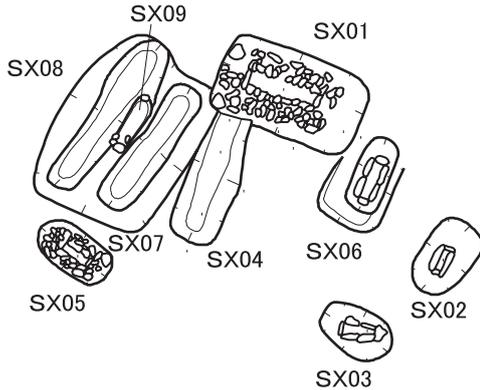
## 6. まとめ

今回、道路建設予定地に含まれる丘陵の3地区において発掘調査を行った。その結果、大内北古墳群に含まれる1地区では、3号墳で埋葬施設合計9基を検出した。3号墳以外の1・2・4・5号墳及び1地区の古墳状隆起部については、調査の結果、古墳でないことが確認できた。また、2地区、3地区の古墳状隆起についても古墳でないことが判明した。ここでは今回調査のまとめとして、多くの成果を得ることができた大内北3号墳について、若干の整理を行いまとめとした。

大内北3号墳の特徴としては、

- ①自然地形を利用した中型の歪な円墳(長軸25m×短軸23m、高さ4m)である
- ②一墳丘多埋葬(9基)である
- ③埋葬施設の形態は、竪穴式石槨(1基)・組合式箱式石棺(4基)・木棺(4基)と多様である
- ④副葬品は鉄器4点(槍先・鑿先・刀子・鎌)と寡少で大形の武器類を含まない

等があげられる。すなわち大内北3号墳については、上記の①のように、墳丘築造にあたって自然地形を最大限に利用し盛土による造成はほとんどされていない点や、②のように、一つの墳



第17図 3号墳埋葬施設配置図

付表3 3号墳埋葬施設形式一覧

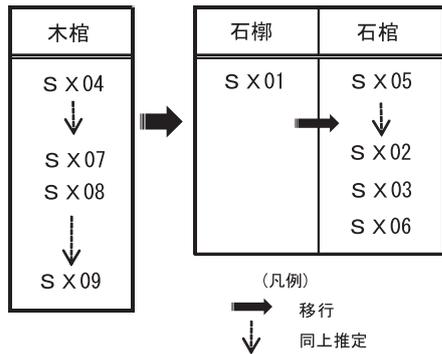
S X 01	竪穴式石槨
S X 02	箱式石棺
S X 03	箱式石棺
S X 04	割竹形(?)木棺
S X 05	箱式石棺
S X 06	箱式石棺
S X 07	割竹形(?)木棺
S X 08	割竹形(?)木棺
S X 09	箱式木棺

丘上に多くの埋葬施設が構築されるなどの点は、丹後地域の京丹後市権現山古墳や但馬地域の豊岡市深谷1号墳・和田山町秋葉山2号墳等に代表される弥生時代後期から続く墳丘の築造方法や墓制を踏襲するものであり、在地における伝統的な葬法をもつ古墳の性格が強く窺われる(付表3・第17図)。

次に、埋葬施設のうち特に竪穴式石槨(室)については、京丹後市域ではこれまでに古墳時代前期～中期に属する例としては5基知られている。代表的なものとしては豊富な副葬品が出土した峰山町域のカジヤ古墳があげられるが、畿内における古墳時代前期の大形前方後円墳に伴う典型的な竪穴式石室とは異なり、石材の用い方や壁面構成に地方的ないし在地的要素が強いことが指摘されている。大内北3号墳の竪穴式石槨S X 01は、大人1人を納めるのがせい一杯で、今回の調査結果では棺は使用されていない可能性も指摘できる。その場合、竪穴式石槨S X 01も石棺として理解すべきである。石槨に天井石を架すと上部に隙間の無いきわめて狭い墓室となり、機能的には組合式石棺と同様な役割しか果たさないものと想像される。組合式石棺については内法長96cm、幅26cmを測る埋葬施設S X 06が最大で成人を埋葬するには無理がある。この場合、埋葬施設S X 01が成人埋葬ではほかの4基の石棺は子供ないし幼児が埋葬されたものとも考えられるが、人骨の遺存するものでは、小型の石棺に成人の再葬骨を納めたものが知られており、大きさからは一概に子供・幼児棺とは断定できないようである。

埋葬施設の構築順については、竪穴式石室S X 01の墓壙が埋葬施設S X 04・07～09の木棺直葬群の墓壙を切っていること等から概ね木棺直葬から石槨・石棺等の石材を使用した葬法への変遷が窺われる。また、木棺直葬については、同じく墓壙の切り合いから埋葬施設S X 04が3号墳では最初に構築され、その後、埋葬施設S X 07～09を含む墓壙が構築されたものと考えられる。

石槨・石棺については切り合い等の明確に先後関係を示すものはないが、5基の埋葬施設を比較すると石材を多用して棺外を厚く覆うものから、やや簡略された構築手法をとるものに移行していくように見て取れる。すなわち規模・構造からみて竪穴式石槨S X 01が石材を使用した埋葬施設としては最も先行するものと考えられる。埋葬施設S X 05は構造から石棺に分類したが、構築形態は埋葬施設S X 01と類似しておりS X 01と同時期かこの直後に構築されたものとみておきたい。次に組合式石棺については、墓壙内に裏込めの石材を詰めるもの(埋葬施設S X 02・03)と



第18図 3号墳埋葬施設変遷想定図

裏込め石を使用しないもの(埋葬施設 S X 06)に分けられる。また石棺の側壁個数では、S X 03と S X 06は基本的に小口と側石左右2石の計6石、S X 02は小口と側石左右各1石の計4石で構成されている。小口の置き方については両側から側石に挟まれる S X 02・06と側石の外に出る S X 03に分けられる。このように側石構成の上では細部に違いが認められるがこれらの類型が構築時期の差を示すものか否かは現状では不明とせざるを得ない。当古墳では先に構築された埋葬施設 S X 01が裏込め石を持つ

ことを重視すれば、裏込め石の有無から判断して(S X 02・03)→(S X 06)への変遷を想定しておきたい。ただし、いずれの埋葬施設も大きく切り合うことなく配置されており、あまり長期にわたらずに計画的に構築されていったものと想定される(第18図)。

このような石槨や石棺等、石材を使用した埋葬施設が多く用いられるのは、当地域とは地理的にも近い但馬地域で調査例が多く報告されており、墓制上でも両地域の密接な関係が窺われる。

大内北3号墳の築造時期については、出土遺物が少量の鉄器のみで時期の確定については不明な点が多いが、これまで例示した各古墳との比較から、おおよそ古墳時代前期末から中期前半頃(4世紀末～5世紀前半)と考えておきたい。

周辺古墳の概略でふれたように、同じ丘陵上に位置する大内1号墳では竪穴式石室、三重谷を越えた大谷古墳では組合式石棺等の大内北3号墳と同様の埋葬施設をもつことが知られている。両古墳は、墳丘・主体部の規模とも大内北3号墳に勝っている。埋葬施設は中心主体部1基のみで大内北3号墳の多埋葬のあり方と大きく異なっている。副葬品に関しては、大谷古墳は鉄器類のほか鏡・玉類をもっており、少量の小形鉄器類をもつのみの大内北3号墳とは大きな相違点が見られる。これらの差異は被葬者間の地位や階層差を表すものとも捉えることができるが、現状では資料が少なく、今後の課題としたい。

今回調査を行った大内北3号墳は、当地域における有力者の家族墓(集団墓)と想定される。大内北古墳群が営まれた時代には、竹野川下流域において畿内の大王墓に匹敵する巨大前方後円墳が出現している。これらの前方後円墳と前述の大谷古墳、大内1号墳及び大内北3号墳などの中規模古墳を比較することにより、竹野川中～上流域の在地有力者層のあり方を考えるうえで、新たな資料を提供するものと思われる。

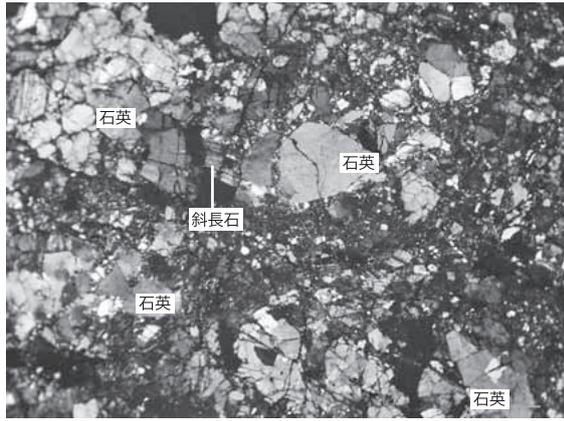
- 注1 このような壁面の石積み構造をもつ「小竪穴式石室」については、最近の用例では「竪穴式石槨」と呼ばれるのが通例であり、本例もこれを用いる。
- 注2 埋葬施設S X01の石槨に使用された石材を複数か所から抽出しプレパラート作成による石材鑑定を行った結果、黒雲母花崗岩・普通角閃石・砂岩が使用されていることが分かった(第19図)。
- 注3 埋葬施設S X02・07の赤色顔料の成分分析により、主成分はベンガラであるが、ごく一部に水銀朱が含まれるとの分析結果を得た。

## 参考文献

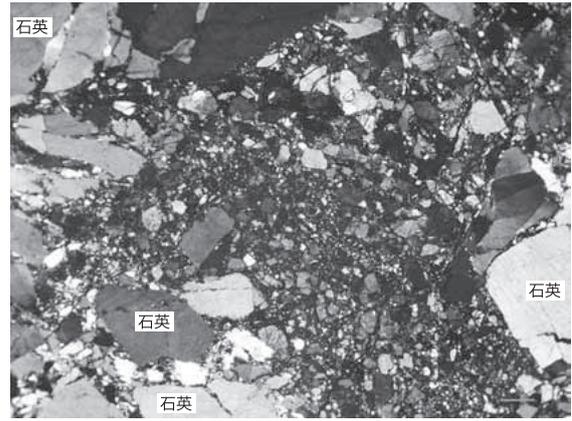
- 『カジヤ古墳発掘調査報告』 峰山町教育委員会 1972
- 『大内1号墳発掘調査概報』 大宮町教育委員会 1983
- 『丹後大山墳墓群』 丹後町教育委員会 1983
- 『権現山古墳発掘調査概報』 久美浜町教育委員会 1984
- 『大谷古墳』 大宮町教育委員会 1987
- 『大宮町の文化財』 大宮町教育委員会 1988
- 『大宮町遺跡地図』 大宮町教育委員会 1991
- 『加悦町の古墳－加悦町文化財調査報告第16集－』 加悦町教育委員会 1992
- 『大宮町遺跡地図』 大宮町教育委員会 1999
- 『梅田古墳群Ⅱ』 兵庫県教育委員会 2003
- 瀬戸谷皓『シリーズ但馬2 但馬の古代2』 但馬文化協会 2005
- 京丹後市史資料編『京丹後市の考古資料』 京丹後市 2010

付表4 京丹後市域の竪穴式石室(石槨)の規模比較

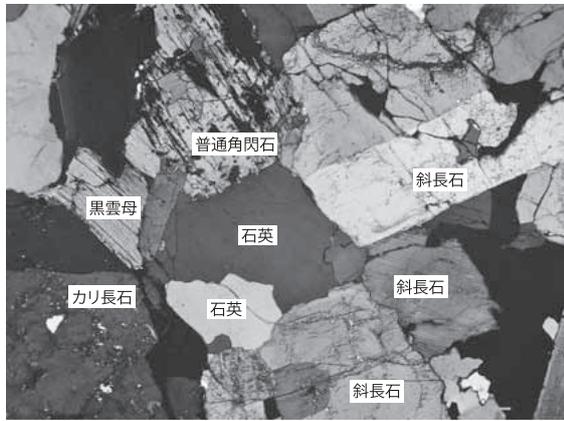
古墳名	内法規模 (cm)		副葬品等	所属時期
	長	幅 × 高		
大山墳墓群 10号墳第3主体	223 × 45	53 × 70		前期
カジヤ古墳第1主体	450 × 73	75 × 70	鏡・筒型銅器・石製腕飾類・鉄器	前期後半
権現山古墳第1埋葬施設	400 × 60	60		前期後半
大内1号墳	270 × 70	45	鉄器	前期末～中期前葉
大内北3号墳埋葬施設S X 01	190 × 28	40 × 25	鉄器	前期末～中期前葉



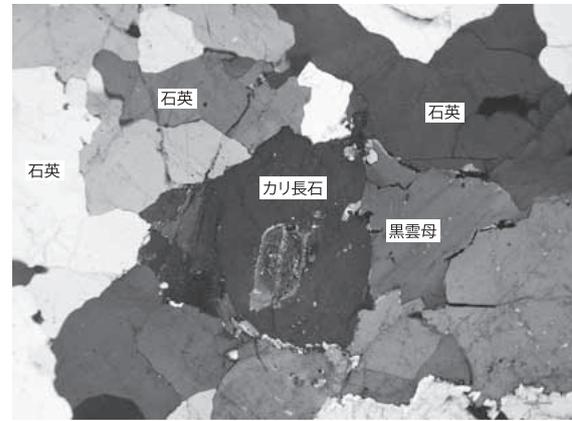
資料1 砂岩



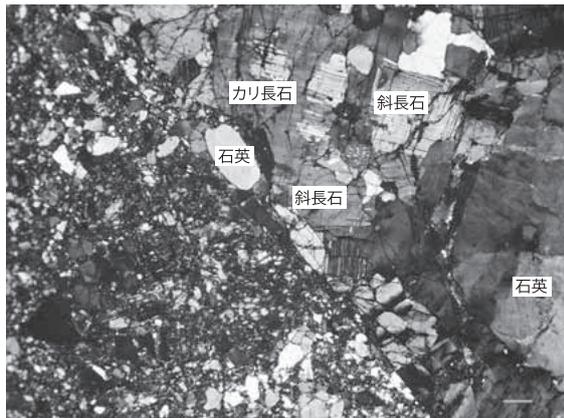
資料2 砂岩



資料3 花崗岩 (普通角閃石・黒雲母)



資料4 花崗岩 (黒雲母)



資料5 砂岩

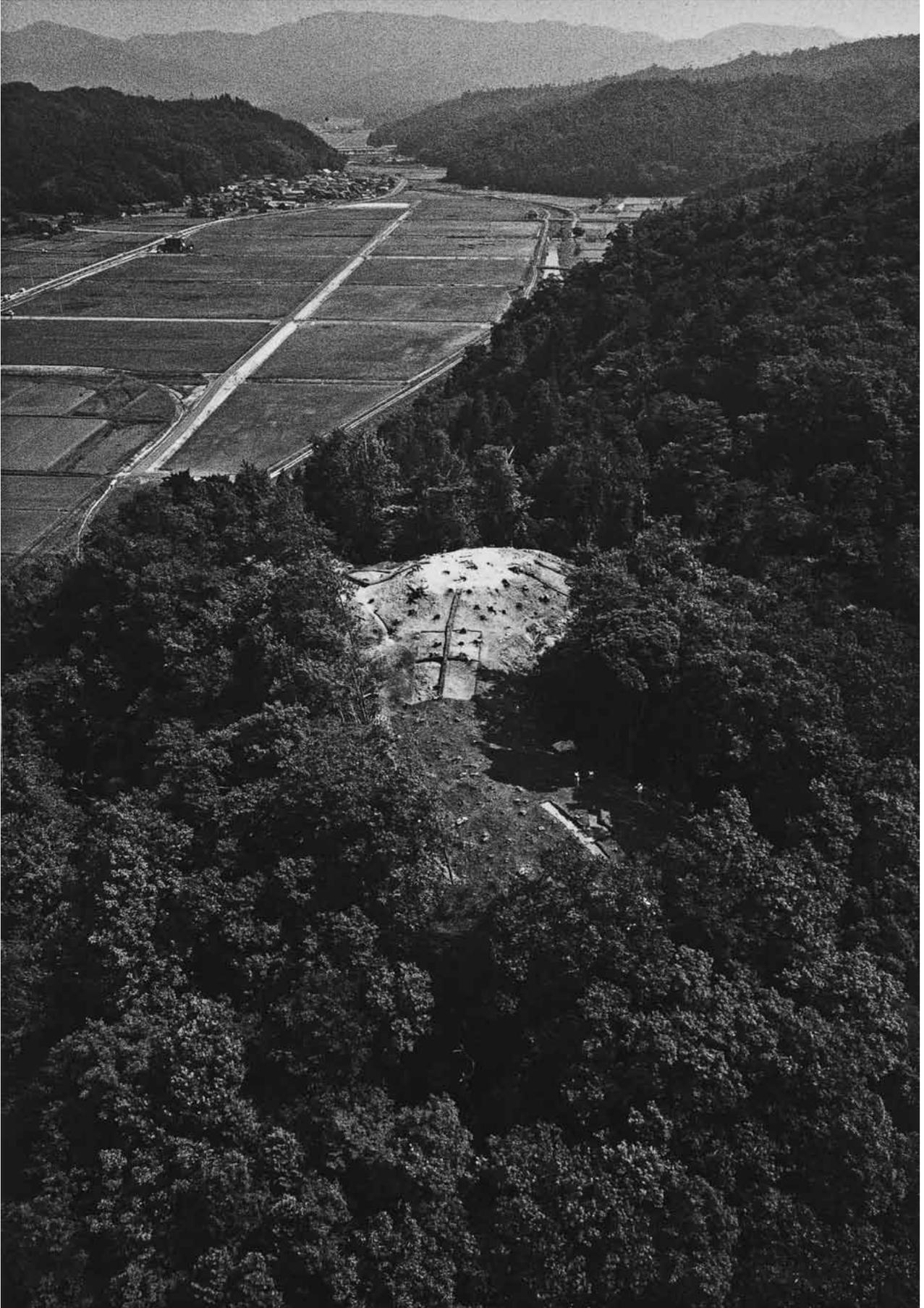
— 0.2mm

第19図 3号墳石材顕微鏡写真

# 圖 版



大内北古墳群全景(北東から)



大内北古墳群全景(南から)



(1) 大内北古墳群全景(北から)



(2) 大内北古墳群全景(南から)



(1) 大内北古墳群全景(北東から)



(2) 大内北古墳群全景(南西から)



(1) 大内北古墳群調査前状況(南西から)



(2) 3号墳全景(北西から)



(1) 3・5号墳全景(南西から)



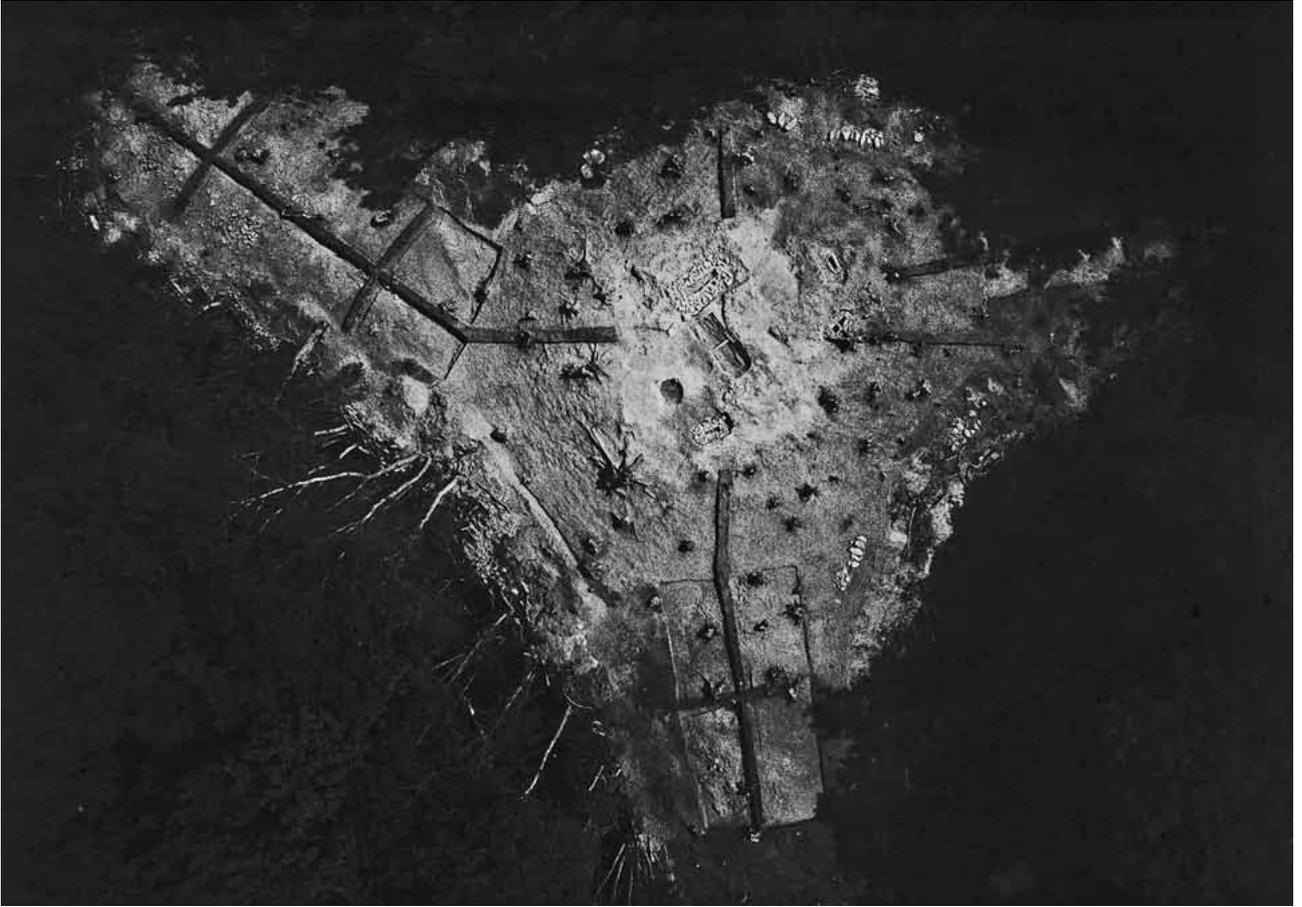
(2) 5号墳全景(南西から)



(1) 1・2号墳調査状況(南東から)



(2) 1・2号墳調査状況(北から)



(1)大内北古墳群全景(上が北東)



(2)大内北古墳群全景(上が北東)



(1) 埋葬施設 S X01 検出状況 (北西から)



(2) 埋葬施設 S X01 天井石 (北西から)



(1) 埋葬施設 S X01 石槨上面(北西から)



(2) 埋葬施設 S X01 石槨(北西から)



(1) 埋葬施設 S X 01 石槨 (東から)



(2) 埋葬施設 S X 01 石槨 (南から)



(1) 埋葬施設 S X 01 石槨西側部、遺物出土状況(東から)



(2) 埋葬施設 S X 01 石槨北壁(南から)



(1) 埋葬施設 S X01 石槨裏込め石(南から)



(2) 埋葬施設 S X01 石槨最下段側石(西から)



(1) 埋葬施設 S X01 石槨最下段側石  
(東から)



(2) 埋葬施設 S X01  
石槨西壁裏込め石(西から)



(3) 埋葬施設 S X01  
石槨西壁背後支石(西から)



(1) 埋葬施設 S X02・03 検出状況 (北西から)



(2) 埋葬施設 S X02・03 検出状況 (南西から)



(1) 埋葬施設 S X02 蓋石 (北西から)



(2) 埋葬施設 S X02 蓋石 (北東から)



(1) 埋葬施設 S X 02 石棺上部(北東から)



(2) 埋葬施設 S X 02 石棺(南東から)



(1) 埋葬施設 S X02 石棺 (北東から)



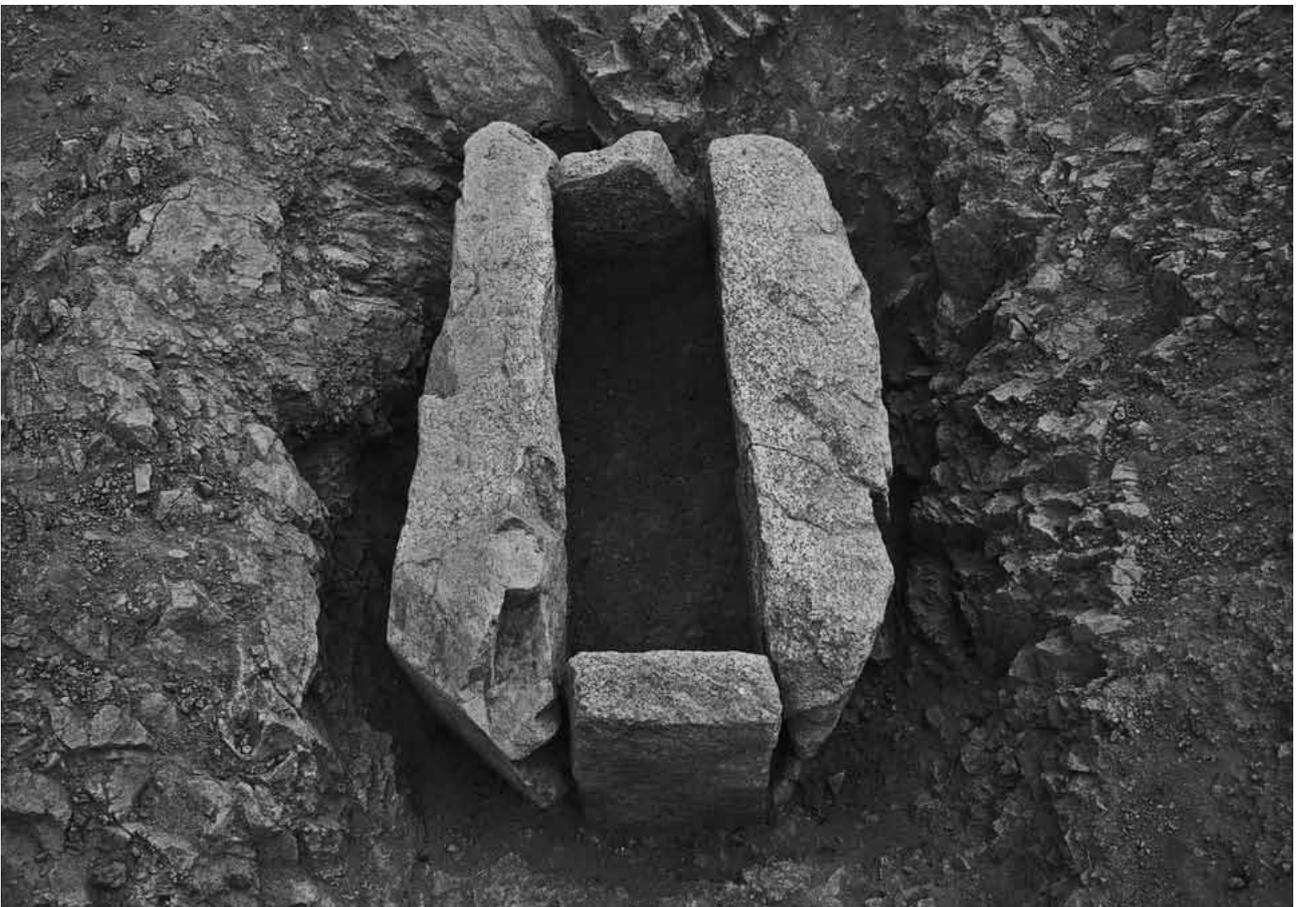
(2) 埋葬施設 S X02 石棺 (南東から)



(3) 埋葬施設 S X02  
石棺壁面赤色顔料 (南西から)



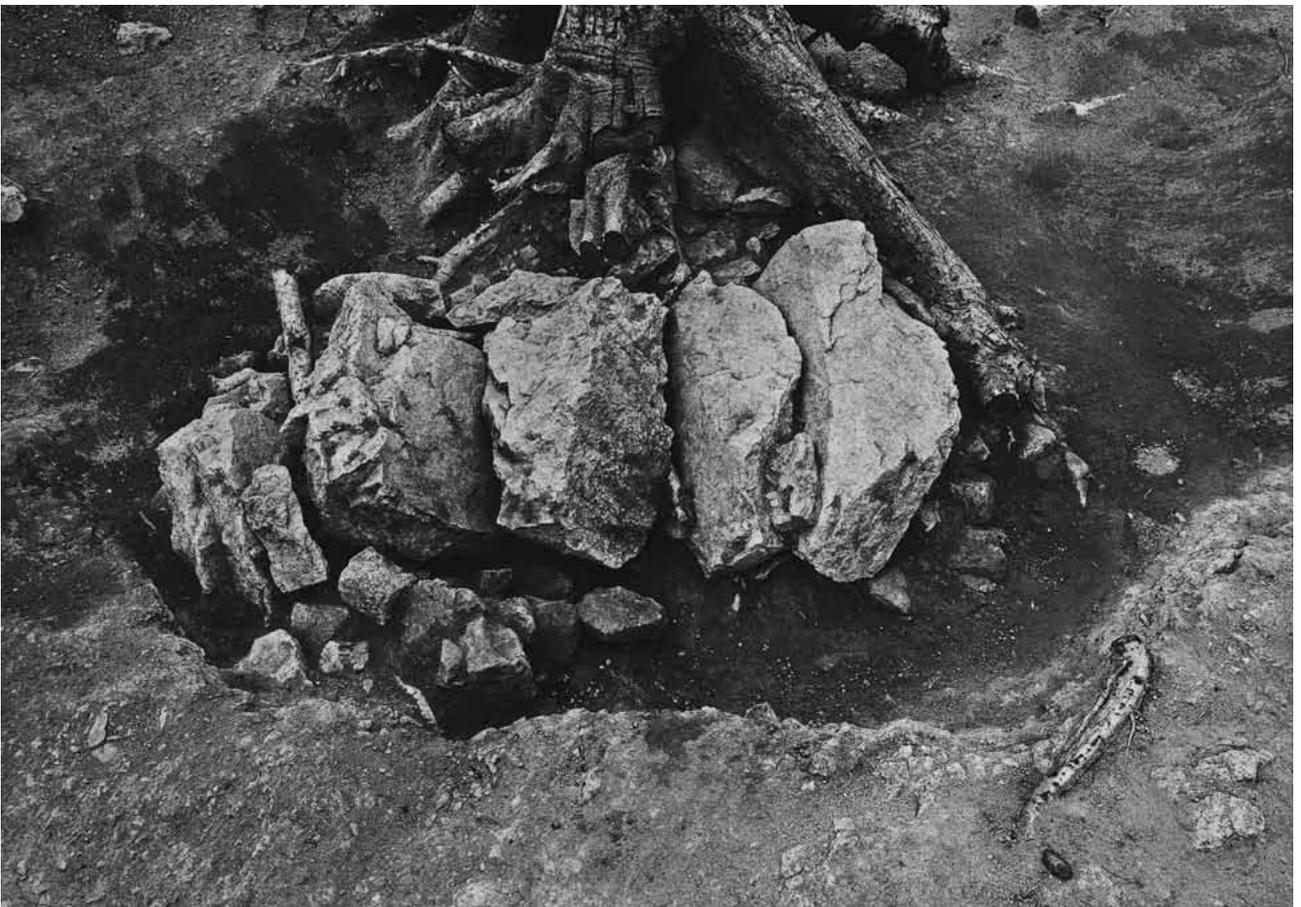
(1) 埋葬施設 S X 02 石棺 (北東から)



(2) 埋葬施設 S X 02 石棺 (北西から)



(1) 埋葬施設 S X03 検出状況 (西から)



(2) 埋葬施設 S X03 (北から)



(1) 埋葬施設 S X03 蓋石 (西から)



(2) 埋葬施設 S X03 石棺上部 (北から)



(1) 埋葬施設 S X 03 石棺 (西から)



(2) 埋葬施設 S X 03 石棺 (南から)



(1) 埋葬施設 S X 05 石棺上部 (南西から)



(2) 埋葬施設 S X 05 石棺上部 (北東から)



(1) 埋葬施設 S X 05 石棺 (北東から)



(2) 埋葬施設 S X 05 墓壇底部 (北西から)



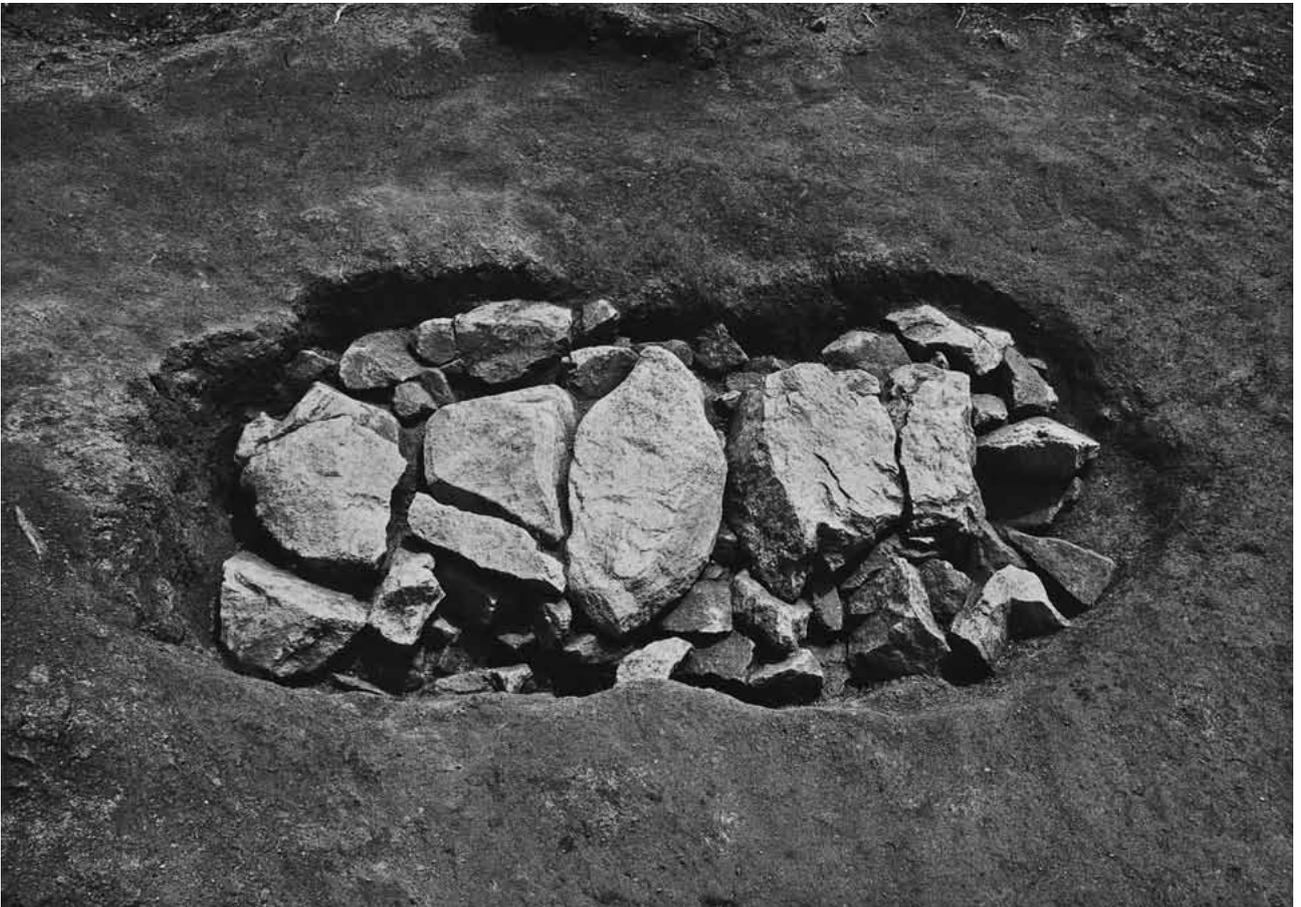
(1) 埋葬施設 S X02・03・06 全景 (南西から)



(2) 埋葬施設 S X06 (南から)



(1) 埋葬施設 S X05 検出状況 (南東から)



(2) 埋葬施設 S X05 検出状況 (南西から)



(1) 埋葬施設 S X06 蓋石 (北西から)



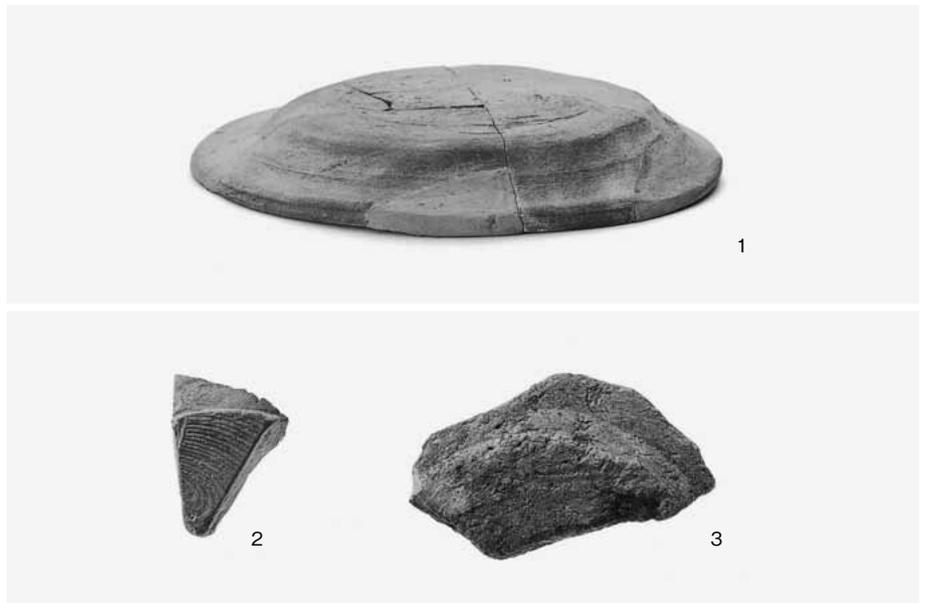
(2) 埋葬施設 S X06 石棺上部 (北東から)



(1) 埋葬施設 S X06 墓壙 (北西から)



(2) 埋葬施設 S X06 (北東から)



(3) 3号墳出土遺物



(1) 埋葬施設 S X04 (西から)



(2) 埋葬施設 S X04 (南から)



(1) 埋葬施設 S X09(南西から)



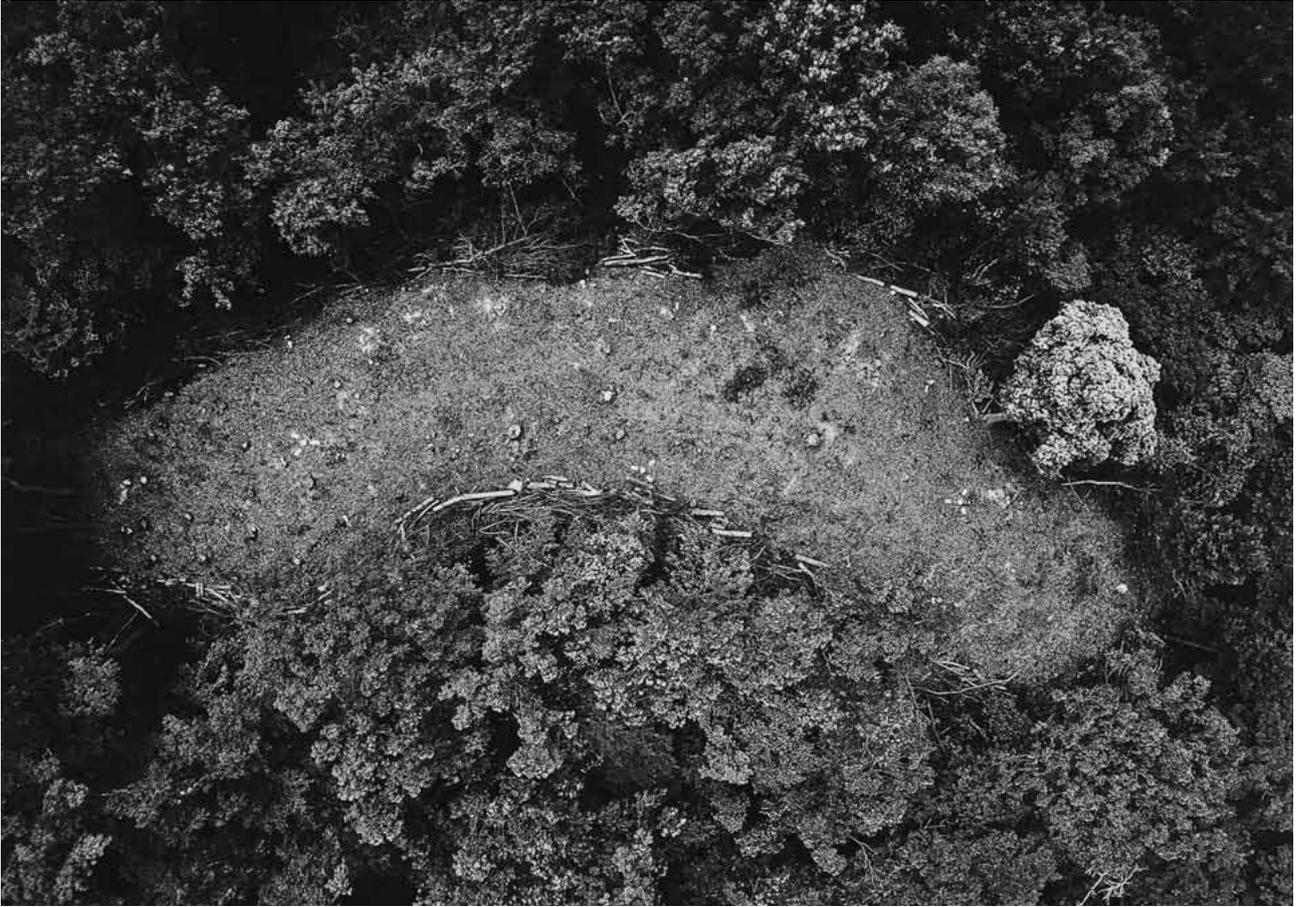
(2) 埋葬施設 S X09(北西から)



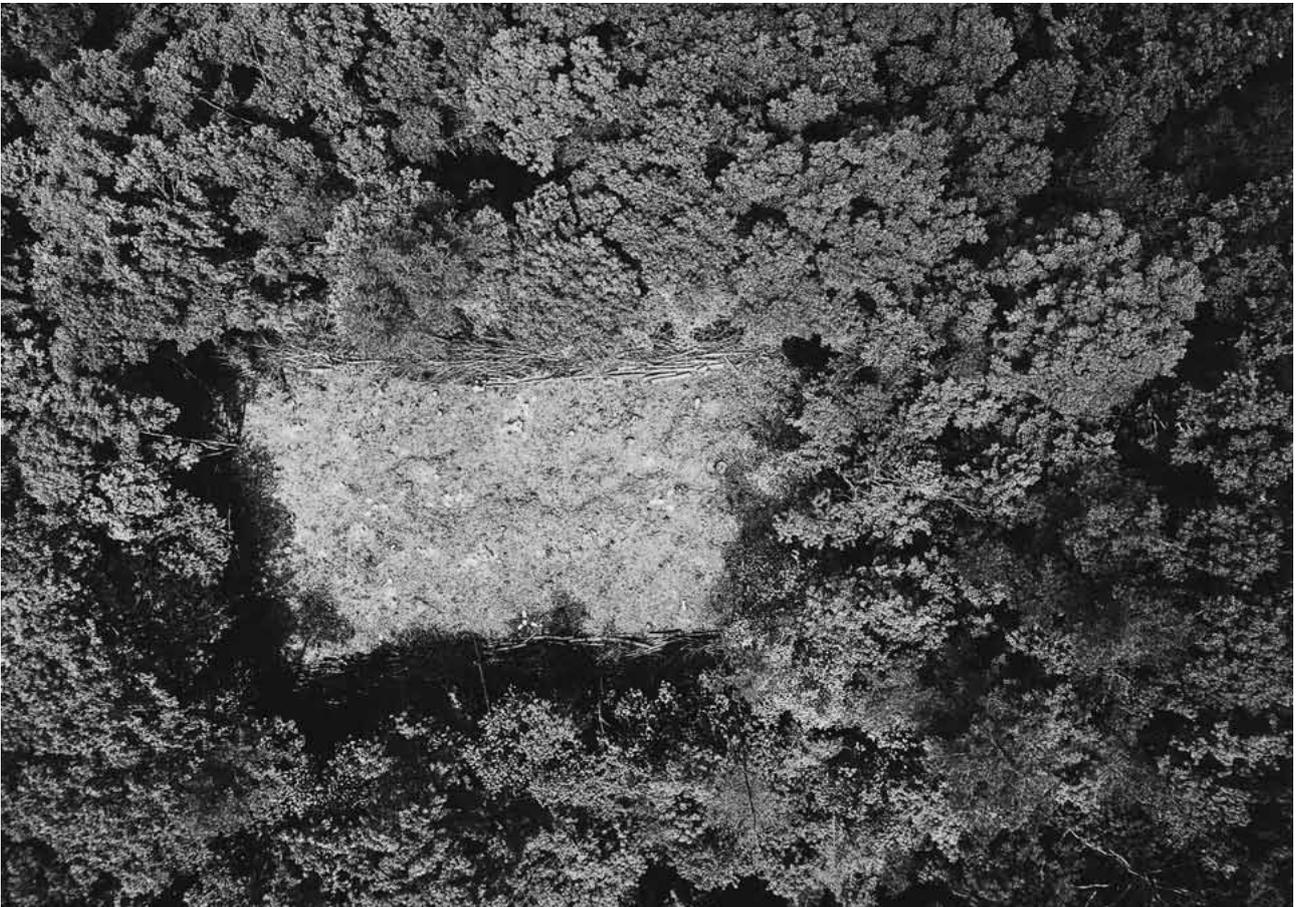
(1) 埋葬施設 S X07 ~ 09 (南西から)



(2) 埋葬施設 S X07 ~ 09 (北西から)



(1) 2地区古墳状隆起全景(上が北)



(2) 3地区古墳状隆起全景(上が西)



(1) 1 地区古墳状隆起調査前  
(北東から)



(2) 1 地区古墳状隆起調査状況  
(北西から)



(3) 3 地区古墳状隆起調査状況  
(南西から)

(1) 2 地区古墳状隆起調査状況  
(北西から)

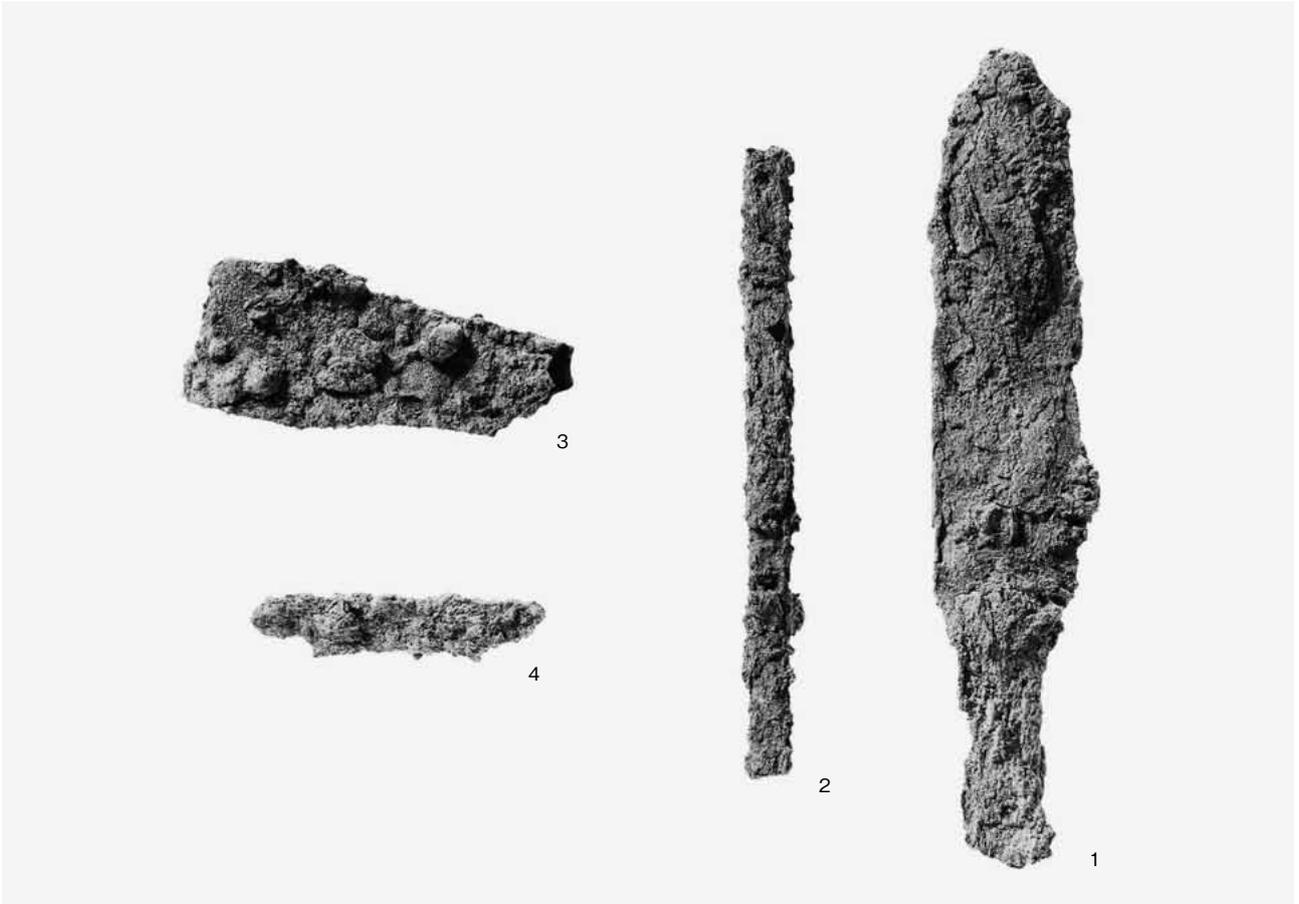


(2) 2 地区古墳状隆起調査状況  
(北西から)

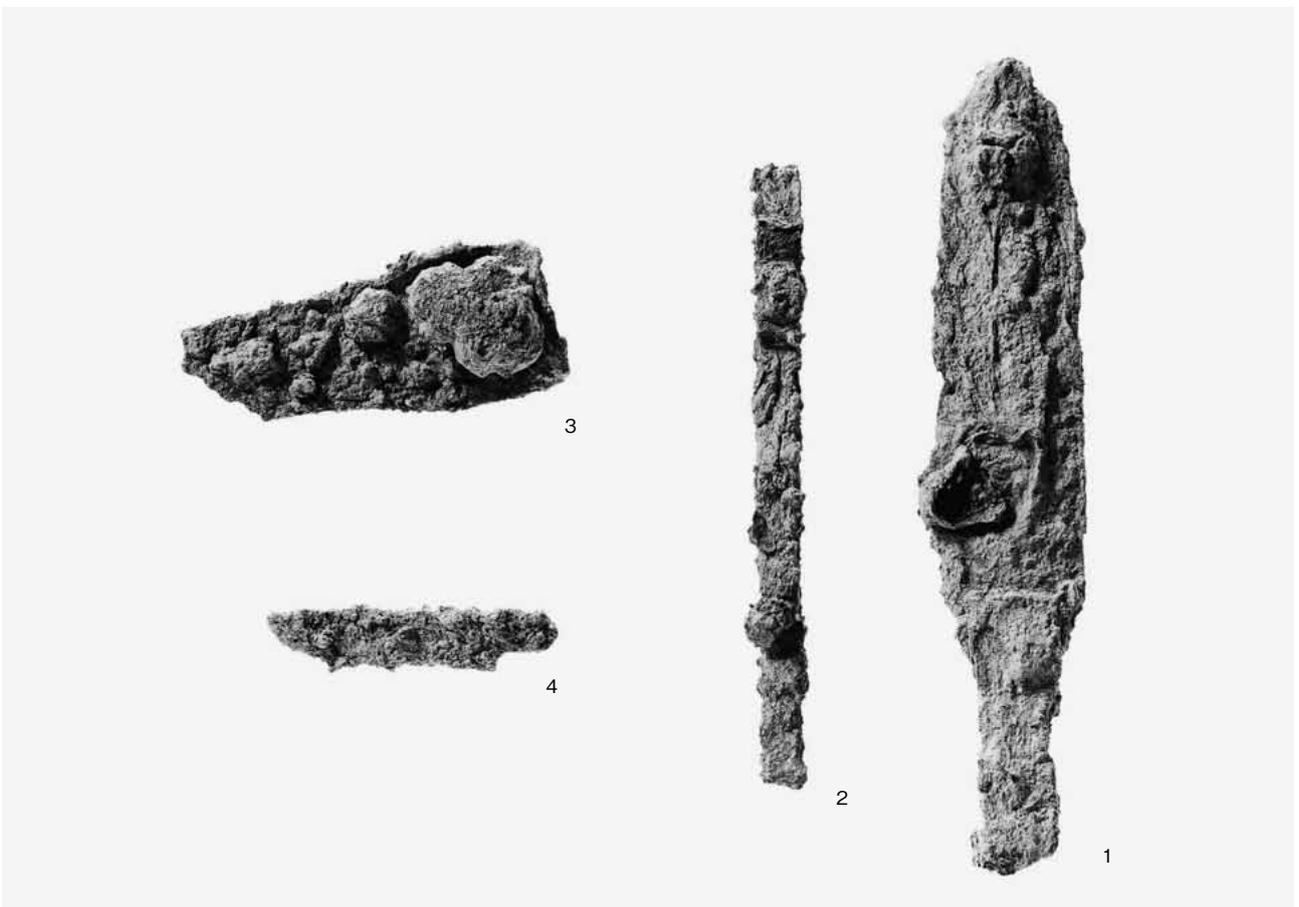


(3) 2 地区古墳状隆起調査状況  
(北東から)





(1) 出土鉄器(A面)



(2) 出土鉄器(B面)